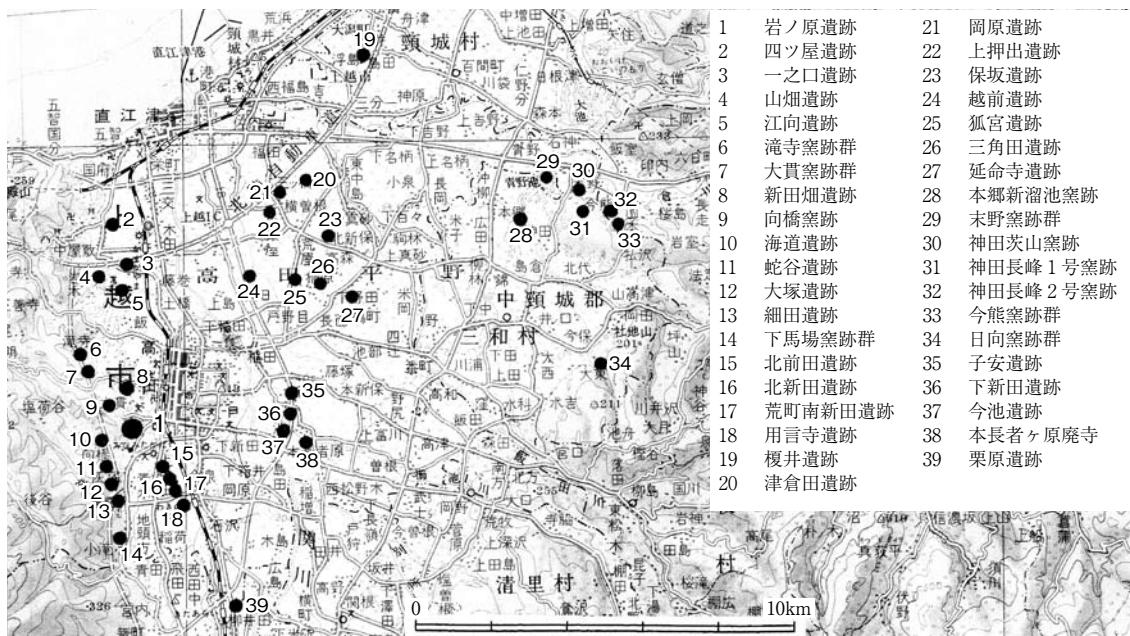


上越市岩ノ原遺跡出土の古代土器について

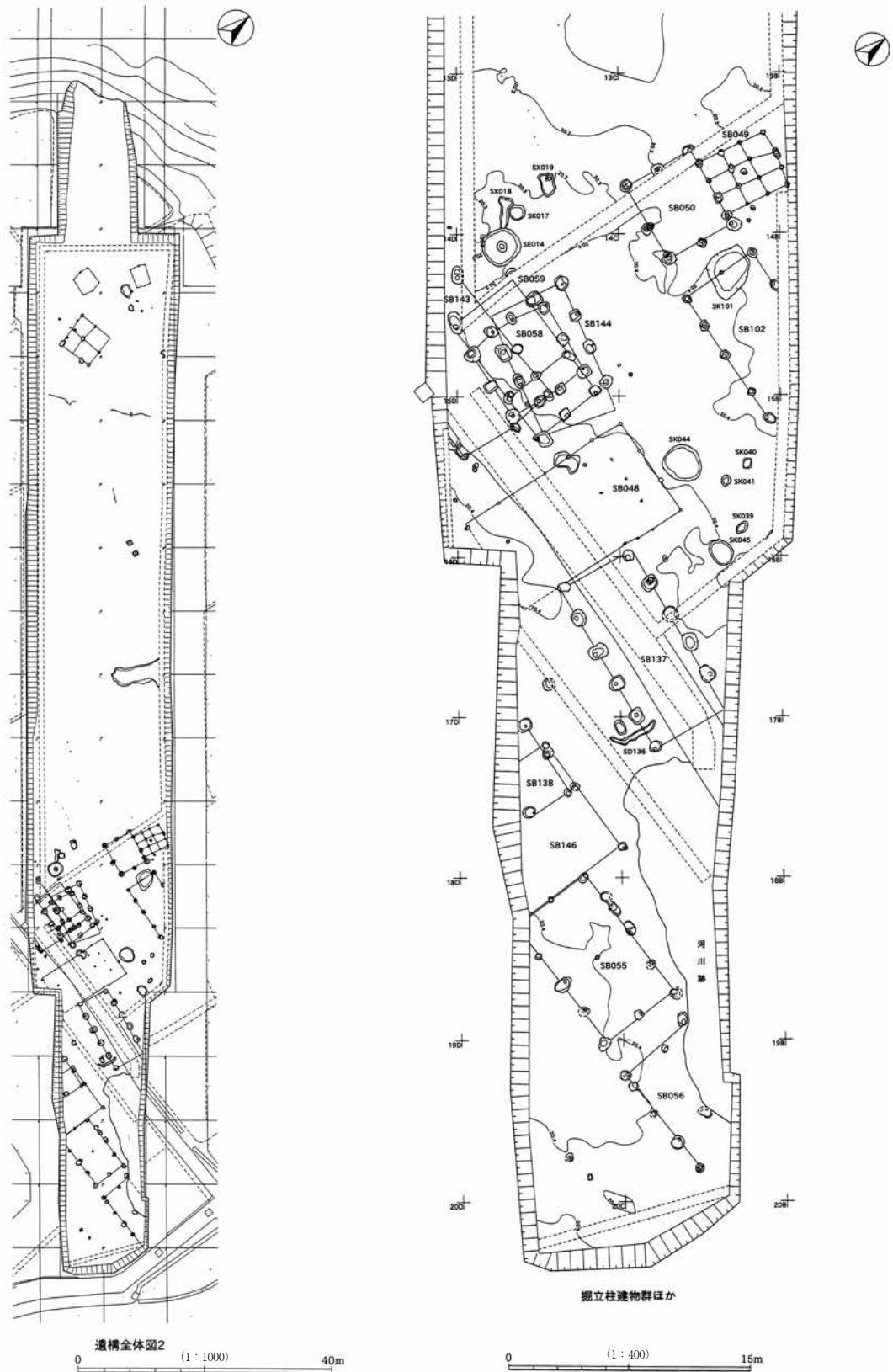
春 日 真 実

はじめに

上越市岩ノ原遺跡は、上越市大字向橋字内沖 303 番地 1 ほかに所在し（第 1 図）、北陸新幹線建設に伴い、平成 18 年に 7,500m² の本発掘調査が行われた（註 1）。調査の結果、8・9 世紀を中心とする土師器・須恵器が出土し、掘立柱建物 16 棟や土坑・井戸などが検出された（第 2 図）。土師器・須恵器には「石井庄」・「石井」・「石庄」・「石」などの墨書き土器があり、大治五年（1130）東大寺諸荘文書並絵図目録等に見られ、天平勝宝五年（753）には成立していた東大寺領石井庄の庄所であることが明らかになった。発掘調査報告書はすでに刊行されており【高橋・金内・田中ほか 2008】、報告書の中で金内 元が出土土器の編年的位置付け検討し【金内 2008】、田中一穂が墨書き土器・木簡などの出土文字資料の考察を行い【田中 2008】、高橋保雄が建物跡の変遷（案）を示すとともに、遺跡の歴史的な意義づけを行っている【高橋 2008】。金内・田中・高橋の論考は、それぞれの分野の研究の現状を踏まえ、岩ノ原遺跡出土の遺構・遺物を詳細に検討した優れたものである。報告書が刊行され約 3 年が経つが、これらの論考に関する明確な反論・異議は提出されていない。異論をはさむ余地はあまりないようにも思えるが、以下では、1 金内や田中とは異なった視点で墨書き土器を含む土器群の編年案を示すとともに、周辺地域との土器群との対比から編年案と既存の土器編年との対応関係や暦年代を検討し、2 1 を踏まえ掘立柱建物の時期や変遷を明らかにするよう努め、3 岩ノ原遺跡の性格について私見を述べ、4 岩ノ原遺跡と周辺の遺跡との関連についても簡単に触れ、高田平野の古代集落を考える際の基礎としたい。



第1図 遺跡位置図(国土地理院 1:200,000高田 平成10年2月発行より作成)



第2図 岩ノ原遺跡の遺構(高橋2008より作成)

1 主要土器群の変遷と年代

(1) 土器群の変遷案

岩ノ原遺跡からは量的にまとまりのある遺構出土の土器群が出土していない。しかし、報告書でも述べられているように、調査区北西部の遺物包含層から出土した土器群はある程度時期にまとまりがある〔金内 2008〕。また検討の結果、墨書き土器の記載内容や字体が、土器の年代と対応関係があることが推測できた。以下では、上記の視点から変遷案を述べる（第3図）。なお、須恵器の胎土の分類は表1に従う。

岩ノ原①期 金内が指摘するように調査区北西部（4～6 BC グリッド）から出土した土器は、ある程度の時期的なまとまりがあり、かつ岩ノ原遺跡から出土した古代の土器群の中では最も古い一群である。杯蓋は口径 15cm 前後のもの（65・66）と、13～14cm 前後のものがあり（71・72）、いずれも端部の屈曲は比較的長い。有台杯・無台杯の底部切り離し技法は回転窓切りが大半を占め、第3図に示した中では、底部外面に回転糸切り痕を残すものは 104、全面ヘラケズリを行うものは 105 のみで、他は回転窓切りである。有台杯は口径 11～12cm と小型のもの（103・104・107・118～120）のほかに、口径 14.4cm（101）、12.5cm 前後（106・105）の大型で浅身のものが確認できる。無台杯は口径 12.5cm 前後で、器高が低く底径が大きいものが多い。須恵器の胎土は C1 類を相当量含むことも、後述する土器群とは異なる点である。

岩ノ原②期 S B 055 出土土器・「石井（庄）」墨書き土器は岩ノ原①期に後続する土器群と考える。S B 055 からはピット 07 を中心に 4 点の須恵器が出土している。4 点とも底部切り離し技法は回転糸切りである。3 は底部回転糸切りの無台杯としては底径が大きく、器高も比較的低い。4・5 は底部外面に「石井（庄）」の墨書きがある。底径は小さいが器壁は厚い。4 点の胎土はいずれも C3 類である。4・5 の他に「石井（庄）」と墨書きされた土器には口径 14cm と比較的大型で器壁の厚い杯蓋 69、底部外面に全面ヘラケズリを行う有台杯 104、擬宝珠形の摘みを持つ杯蓋 91・92、底部回転糸切りの無台杯 173・193 などがある。胎土はいずれも C3 類である。

岩ノ原③期 「石庄」・「石」墨書き土器の多くは、S B 055 出土土器・「石井庄」墨書き土器に後続する可能性が高い。141～144 の墨書きは比較的大きな文字で、「石」の 2 画目・「庄」の 3 画目の先端付近から強く外反し、「石」の 4 画目の屈曲がやや丸みを帯びる（以下石庄 a 類とする）。底部の器壁が薄く、外面中央に回転糸切り痕を残し、胎土はいずれも C3 類で、140 よりは後出的なものであろう。145・200 の墨書きは草書風？の「石」を記す（以下、石庄 b 類とする）。2 点とも胎土は C3 類であり、145 は 141～144 と同様に底部外面中央に回転糸切り痕を残す。

第1表 須恵器の胎土

分類	特徴	須恵器窯
A 群	石英・長石・雲母など花崗岩起源の大型の鉱物を多く含む粗い胎土。	阿賀北地域の須恵器窯の主体的に見られる。
B 群	軟質の白色小粒子を定量含む胎土。きめ細かい B 1 と、砂質の強い B 2 の 2 種がある。小型の有台杯・無台杯には B 1、その他の器種には B 2 が主に用いられる。	佐渡市（旧佐渡郡羽茂町）小泊窯跡など佐渡市南西部の須恵器窯に見られる。
C1 群	小型の石英・長石を少量含む比較的精良で粘土質の強い胎土。	上越地域では高田平野東側の末野・日向窯跡群で主体的な胎土。他地域では新潟市東部の新津（丘陵）窯跡群、長岡市東部の東山（丘陵）窯跡群でも主体的な胎土である。阿賀北の須恵器窯の一部にも見られる。
C2 群	海綿骨針を定量含む砂質の強い胎土	長岡市西部の旧和島村から三島郡郡出雲崎町にかけて分布する西古志窯跡群や濱海川流域に点在する須恵器窯に主体的に見られる。
C3 群	砂質もしくはシルト質で均質な胎土	高田平野西側に点在する滝寺窯跡群などの須恵器窯に主体的に見られる。
D 群	その他	

岩ノ原④期 151・174・175・267 の墨書は石庄 b 類に比べ文字が小さく、「石」の2画目・「庄」の2画目が直線的で、「石」の4画目が鋭角的に屈曲する（以下、石庄 c 類とする）。151・174・175 はいずれも胎土B群の無台杯で、底部外面に回転範切り痕を残す。器壁は比較的薄く、口縁部の外傾度は大きい。267 は底径 6.0cm の土師器無台碗であり、底部だけ比較すれば、後述する石庄D類の土師器無台碗と近似した形態である。

263～266 の墨書は石庄 c 類と比較すると大きな文字で、「石」の1画目が比較的長く5画目が右上がりとなる。また田中一穂が指摘するように「庄」の4画目がマダレの中に収まる（以下、石庄 d 類とする）。4点とも口径 12.5cm 前後・器高 3.5～4 cm、底径 6 cm 前後の近似した形態の土師器無台碗である。

岩ノ原遺跡出土の土器は、以上のような4期に大別して変遷を理解することも可能と考える。

(2) 編年の対応関係（第4・5図）

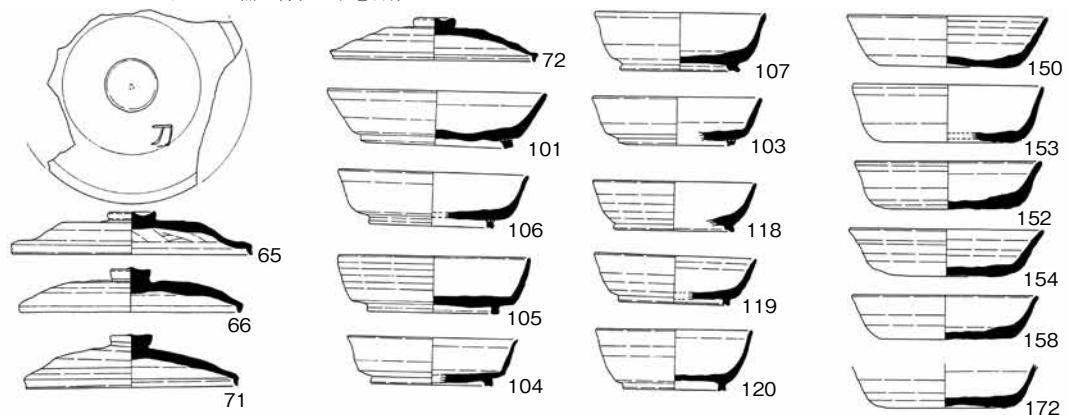
高田平野の8・9世紀の土器編年については、小島幸雄【小島ほか 1983】や坂井秀弥【坂井 1984】（以下、坂井編年とする）が土器編年を示し、その後 笹沢正史【笹沢 2002・2003a】（以下 笹沢編年とする）や小田由美子【小田 2006】（以下 小田編年とする）らが編年を提示しており、筆者も編年案を示したことがある【春日 1999・2005】。小島・坂井・笹沢・小田・筆者の編年（案）は細部に違いがあるが大枠で一致しているものと考えている。以下では（1）で検討した岩ノ原①～④期と既存の土器編年（案）との対応関係を検討するとともに、1で示した変遷が既存の土器編年（案）と大きく矛盾しないことを確認したい。

岩ノ原①期 66・71・101・103・105・106・150～152・159 は、今池 SK 24・25 出土土器（第4・26図）、岡原遺跡 SK 18 出土土器（第4・30図）などに類似する資料がある。また、胎土 C1 群の須恵器の主要な供給先と推測できる高田平野東側の須恵器窯では末野窯跡採集資料（第24図）に類例がある。72・104・107・118・120 などは滝寺 1・7 号窯出土土器（第21図）や今池 SK 21A・B 出土土器（第4・27図）などに類似する資料が確認できる。今池 SK 24・25 出土土器は坂井編年Ⅱ期、筆者の編年ではⅣ 1 期、笹沢編年Ⅲ期～Ⅳ 1 期に、岡原遺跡 SK 18 出土土器は筆者の編年でⅣ 1 期、笹沢編年Ⅳ 1 期にそれぞれ位置付けている資料である。今池 SK 21A・B 出土土器は、坂井編年Ⅲ期、筆者の編年ではⅣ 2 期、笹沢編年Ⅳ 2 期、小田編年 1 期に、滝寺 1・7 号窯出土土器は小田編年 1 期に位置付けている資料である。

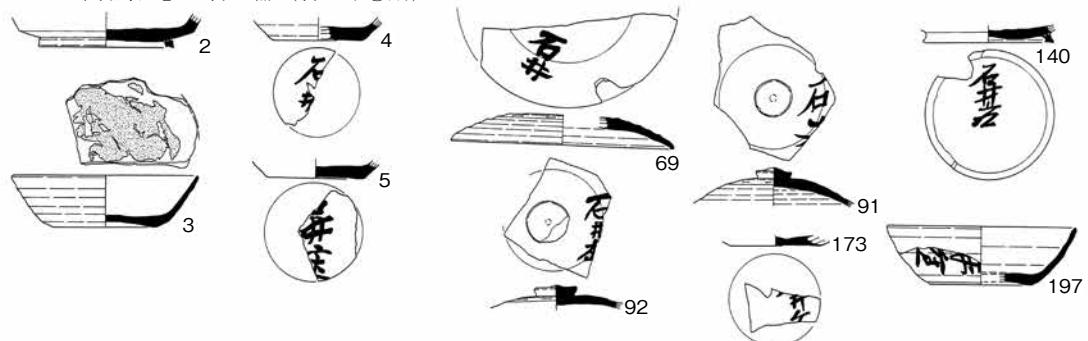
岩ノ原②期 須恵器のほとんどは胎土 C3 群である。杯蓋 91・92、無台杯 3～5、有台杯 140 などは胎土 C2 群の須恵器の主要な供給先と推測できる高田平野西側の須恵器窯では滝寺 1・7・12・13 号窯出土土器（第4・21図）に対比できる土器群であろう。また、今池遺跡群の中では、SK21 A・B、SK102（第25図）、SK254（第26図）出土土器などに類似した資料がみられる。滝寺 1・7・12・13 号窯出土土器は小田編年 1～2 期、今池遺跡 SK 21 A・B、SK 102、SK 254 出土土器は坂井編年Ⅲ～Ⅳ 期、笹沢編年Ⅳ 2～V 1 期、筆者の編年ではⅣ 2～Ⅳ 3 期に位置付けている資料である。

岩ノ原③期 岩ノ原②期同様、須恵器の多くが胎土 C3 群である。須恵器有台杯 141・144、無台杯 200 は高田平野西側の丘陵の須恵器窯では、滝寺 11 号（第5図 705・第26図）・滝寺 2 号窯（第5図 361・第22図）・大貫 1 号窯（第5図 890・914・第23図）などが対比できる資料である。今池遺跡群では SD 201（第4図 256・第28図）、飯田川流域では狐宮遺跡 SB 1・2（第4図 45・第31図）などに類似した須恵器が確認できる。今池 SD 201・狐宮 SB 1・2 ではこれらの須恵器に伴って器高の低い土師器無台胎土（第5図 25・26、226）、底部が厚手の B 群の須恵器無台杯（第5図 33・227）などが共伴している。今池遺跡 SD 201 は坂井編年 V 期、筆者の編年では V 2 期に、滝寺 11 号・滝寺 2 号窯・大貫 1 号窯は小田編年 3～4 期に位置づけている資料である。狐宮 SB 1・2 は野水晃子が筆者の編年の V 1 期に並行する土器群

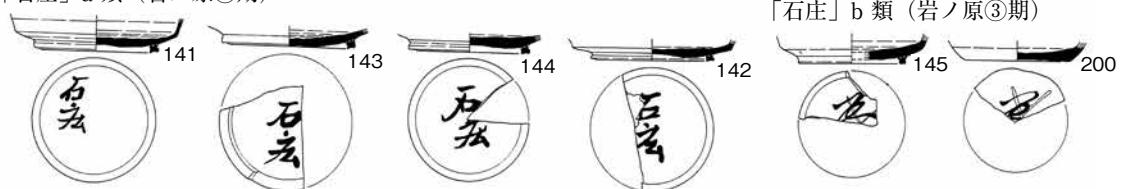
2~4B・Cグリッド出土土器（岩ノ原①期）



SB055・「石井庄」墨書き土器（岩ノ原②期）

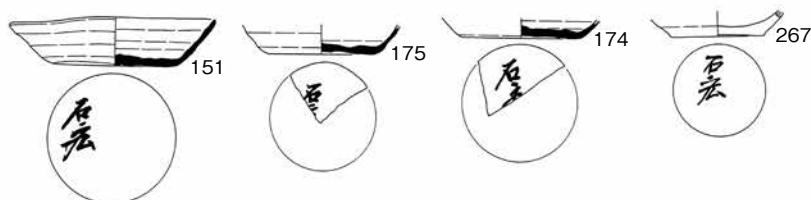


「石庄」a類（岩ノ原③期）

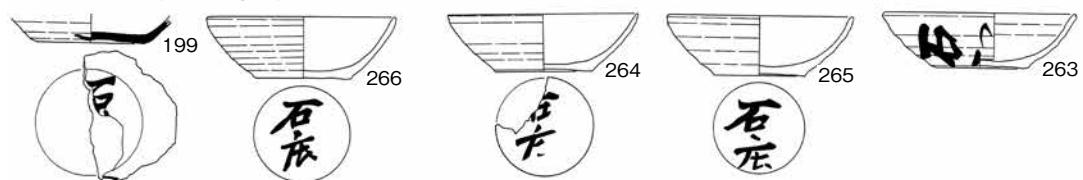


「石庄」b類（岩ノ原③期）

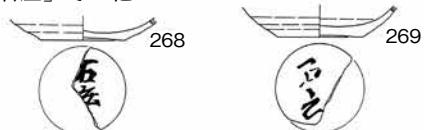
「石庄」c類（岩ノ原④期）



「石庄」d類（岩ノ原④期）

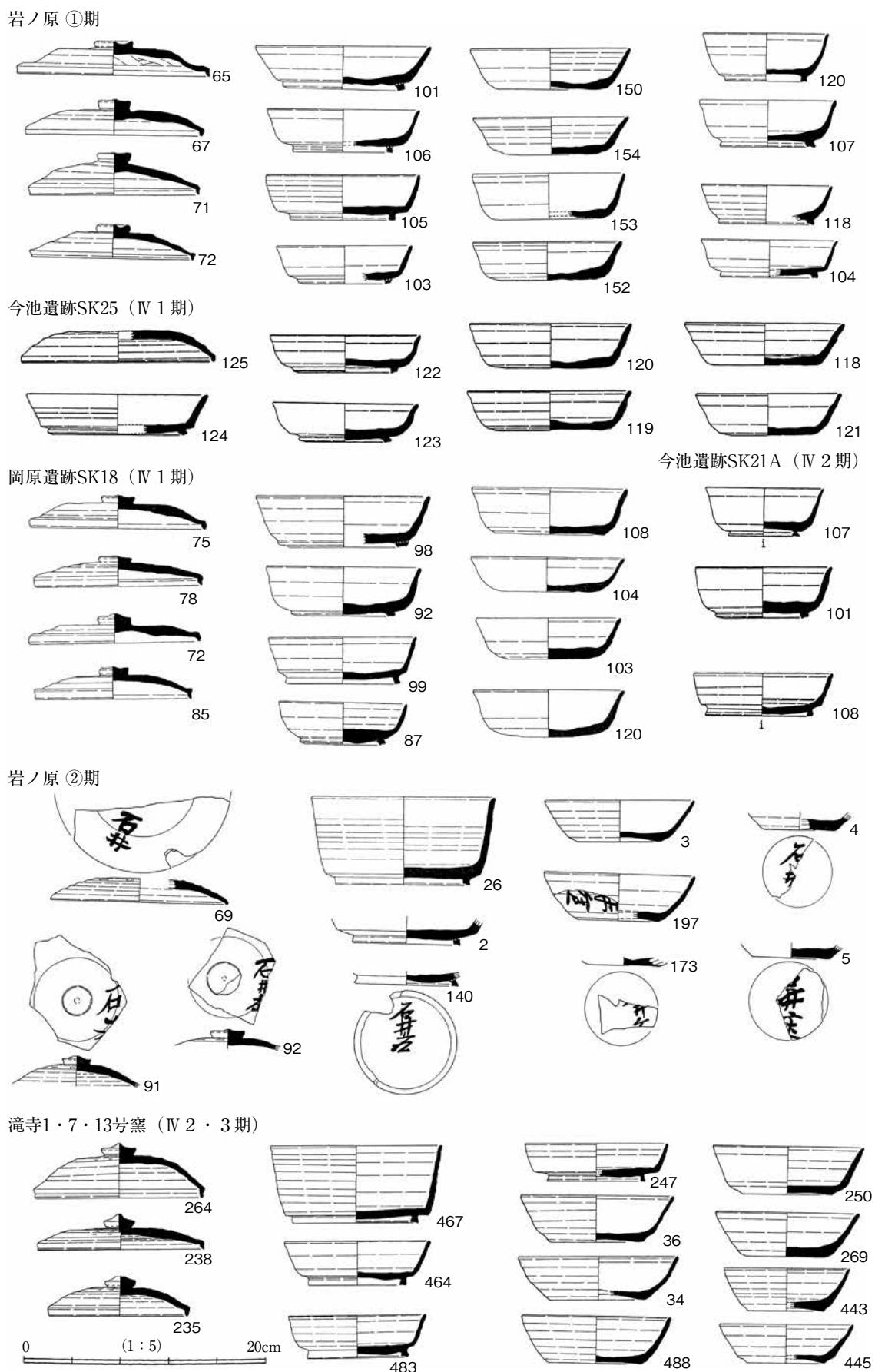


「石庄」その他



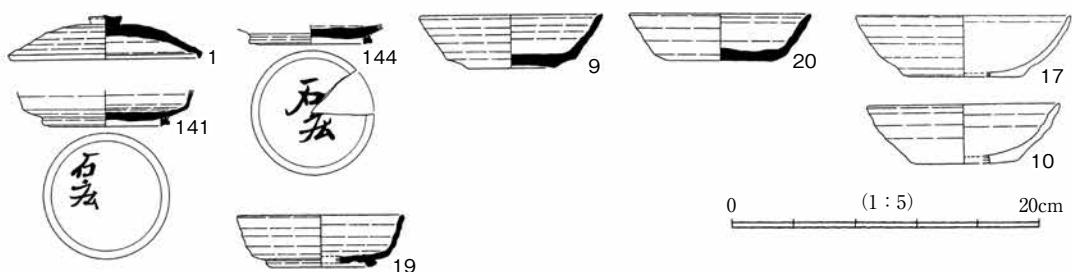
0 (1 : 5) 15cm

第3図 岩ノ原遺跡出土土器の変遷案(高橋ほか2008より作成)

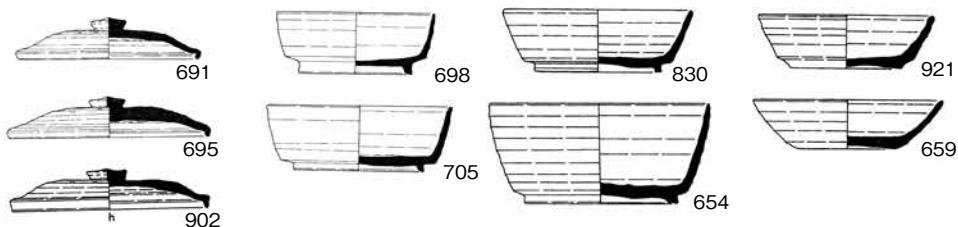


第4図 岩ノ原遺跡出土土器と関連資料(高橋ほか2008、坂井ほか1984、笹川19、小田200より作成)

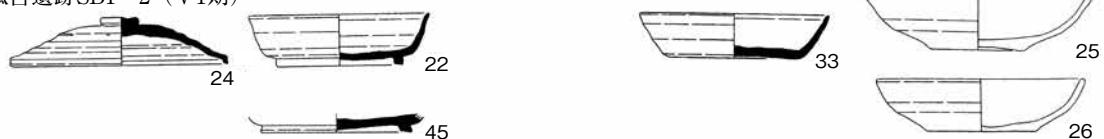
岩ノ原遺跡 ③期



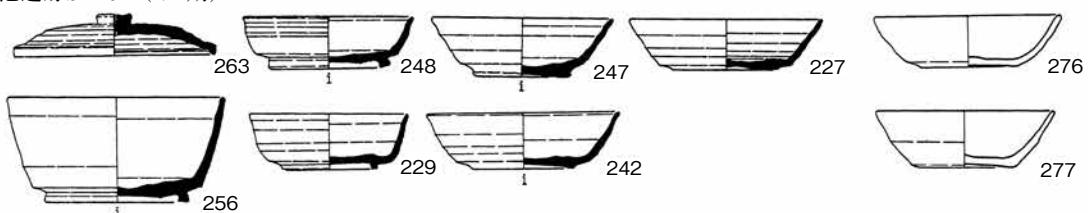
滝寺10・11号室、大貫1号窯 (V1~V2期)



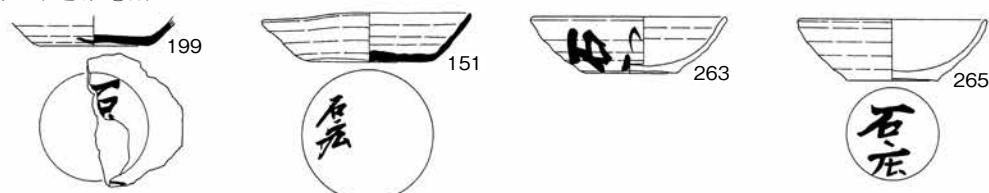
狐宮遺跡SB1・2 (V1期)



今池遺跡SD201 (V2期)



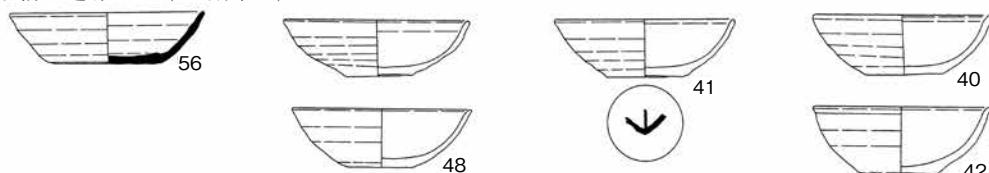
岩ノ原遺跡 ④期



今池遺跡SD3 (VI1期中心)



北前田遺跡SD5 (VI1期中心)

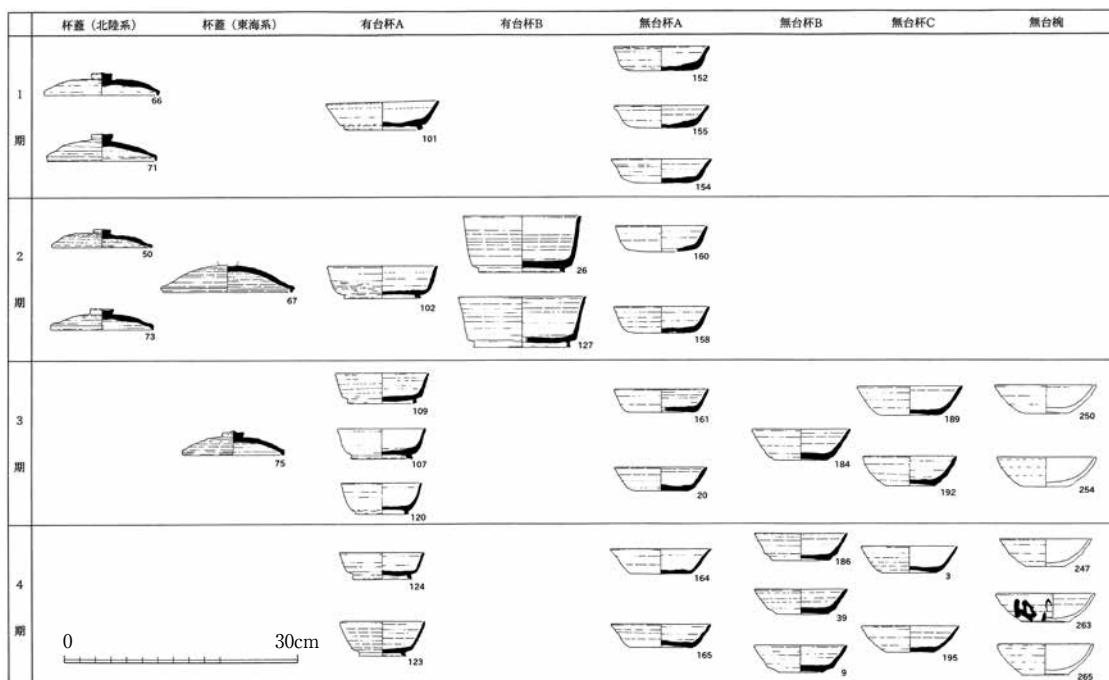


第5図 岩ノ原遺跡出土土器と関連資料

(高橋ほか2008、小田ほか200、飯坂ほか200、坂井ほか1984、金内ほか2008より作成)

と報告しており [野水 2007]、筆者もこれに賛同する。

岩ノ原④期 須恵器以外に土師器無台椀が定量確認でき、須恵器は胎土B群が主体を占めるが、胎土C2群も存在する(第5図199)。胎土B群の須恵器無台杯は底部が比較的薄手で口縁の外傾度が大きい(第4図151)。土師器無台椀はやや浅いもの(第4図263)とやや深いもの(第4図285)があるが、底径は比較的小さい。これらの土器群は今池遺跡群の中では今池遺跡S D 3(第5図323・313・390・387・第33図)、



第6図 金内による岩ノ原遺跡出土土器の編年(金内2008より作成)

第2表 編年対応表

本稿	筆者[春日1999]	小田[2006]	坂井[1984]	笛沢[2003]	備考	註		
岩ノ原①期	III2期		I期	III1期	神龜二年(725)	①		
	IV1期		II期	III2期	天平七・八年(735・736)	②		
岩ノ原②期	IV2期	1期	III期	IV1期				
	IV3期	2期	IV期	IV2期	西暦775年前後	③		
岩ノ原③期	V1期	3期	+	V1期	長岡京前後	④		
	V2期	4期	V期	V2期				
岩ノ原④期	VII1期				天安元～貞觀元年(857～859)	⑤		
	VI2・3期				貞觀五年(863)	⑥		
			VI期	VI1期	元慶年間(877～885)	⑦		
					VI2期			
					VI3期			

①長岡市下ノ西遺跡でIII2期を中心とした土器に共伴した木簡の記年銘(田中 靖ほか2003)

②上越市延命寺遺跡でIII2期に共伴した紀年銘木簡の年代[山崎ほか2008]

③IV2期の滻寺7号窯に共伴した板材の年輪年代測定法から推定した伐採年代

④IV3期の資料である上越市今池遺跡SK102に「壺G」が共伴(坂井ほか1984)

⑤新潟市駒首潟遺跡で天安元～貞觀(857～859)にほぼ限定できる木簡がVI1期を中心とする土器群に共伴

⑥「日本三代実録」に記録されている地震が発生した年。長岡市八幡林遺跡・新潟市釈迦堂遺跡でこの地震と考えられる断層・噴砂を確認(田中1994・江口2001)。

⑦加茂市鬼倉遺跡で「元口」と記された木簡がVI2・3期の土器に共伴

岩ノ原遺跡に比較的近い位置に所在する北前田遺跡 S D 5 出土土器などと対比可能な資料であろう。今池 S D 3 出土土器（第5図）は坂井編年VI期、筆者の編年ではVI 1を中心とする時期の資料である。

（3）各期の暦年代

筆者の編年案の年代観については、以前に述べたことがある〔春日2006・2007〕。その後、上越市延命寺遺跡から紀年銘木簡などが出土した〔山崎ほか2008〕。延命寺遺跡は上越市東部の飯田川中流域に位置し、筆者の編年の古代I期と古代III2期を中心とする遺跡である。延命寺遺跡 SD1700 出土土器には天平八年（736）の具注暦木簡が共伴した。遺跡の中心的な建物である SB002・003 周辺の遺物包含層とその上位の層から天平七・八年（735・736）年の紀年銘木簡が出土している。SD1700 出土土器、SB002・003 出土土器（第26図）は筆者の編年のIII2期（の新相）に土器群である。筆者はIII2期の暦年代を720～730年を中心とする時期としたが〔春日2006〕、延命寺遺跡の調査成果はこのことと大きく矛盾しない。岩ノ原①期はこれに後続し、筆者の編年のIV1期を中心とし、一部IV2期を含む土器群であることから、8世紀第3四半期を中心とし、一部8世紀第4四半期にかかる時期と考える。

岩ノ原②期は筆者の編年のIV2～IV3期、小田編年の1・2期に並行する時期とした。小田編年1期の滝寺7号窯の「灰原の1枚目の灰層上」には長さ230cm、幅28cmの柾目取りの板材が3枚出土しており〔小田2008〕、このうち1枚の年輪年代測定が行われ、残存最外年輪の年代が742年であった〔光谷2006〕。測定を行った光谷拓実は、除去されたであろう片材を加味し、775年頃の伐採年を推定している（註2）。したがって、小田編年1期は8世紀末を中心とする時期となり、これに後続する小田編年2期は9世紀初頭頃と考える。小田編年1・2期に概ね並行する岩ノ原②期の暦年代は8世紀末～9世紀初頭頃と考える。

岩ノ原④期の胎土B群の須恵器無台杯（第3図151・199）は筆者の編年のVI1期に通有のものである。VI1期は長岡市（旧和島村）八幡林遺跡、新潟市（旧黒埼町）釈迦堂遺跡の断層・噴砂等の検討から貞觀五年（863）の地震前後と考えている〔春日2006〕（註3）。したがって岩ノ原④期は9世紀第3四半期、これに先行する岩ノ原③期は9世紀第2四半期頃と考える。これらをまとめると表2となる。

以上、岩ノ原遺跡出土土器を岩ノ原①～④期の4時期に区分し、既存の編年（案）との対応関係や暦年代を検討した。ここで述べた変遷案や既存の編年との対応関係や暦年代は、金内が示した土器編年（第6図）と一致する点が多いが、暦年代観を中心に異なる点も少なくない（註4）。報告書では8世紀末とされた遺跡の上限を9世紀第3世半期までやや遡らせ、「9世紀第2四半期～第3四半期に相当する」とされた石井庄関係の墨書き土器も8世紀末頃まで遡る可能性を示した。

2 掘立柱建物の変遷と年代

岩ノ原遺跡の掘立柱建物の変遷については、高橋保雄が報告書の中で検討している〔高橋2008〕。高橋は主に建物の切り合い関係・主軸方位・建物型式などから4期の変遷を示した。以下では、掘立柱建物を構成するピット（註5）などから出土した土器や柱筋などに着目し掘立柱建物の変遷や年代を考えたい。掘立柱建物の分類は第8図に従う。

（1）ピットから出土する遺物と建物の関係

掘立柱建物を構成するピットから出土した土器の個別的な検討に入る前に建物の年代とピットから出土する遺物の関係について簡単に触れたい（第7図）。掘立柱建物を構成するピットの断面は柱痕（根）に着目すると以下の大別3種が存在すると考え、その形成過程は第8図のように考えた（註6）。

I類：検出面付近から下端まで柱痕（根）が確認できるもの（SB059-P02など）

II類：上部がレンズ状堆積で、途中から柱痕（根）が確認できるもの（SB055-P07など）

III類：柱痕（根）が確認できないもの（SB058-P05など）

このように考えた場合、I類から出土した遺物は、柱痕から出土した場合を除けば建物が機能する以前の遺物となり、出土した最新の遺物が、建物が建てられた年代の上限を示すことになる。しかし、II類の上層やIII類から出土した遺物は、建物の廃絶後に堆積した土層に含まれる遺物であり、最新の遺物が建物の廃絶の上限を示すことになる。また、周辺に散在していた掘立柱建物の機能時の遺物が含まれている場合もある。遺物に時期的なまとまりがありかつ遺物量が多い場合はこの可能性を考慮してもよいであろう。

（2）掘立柱建物の周辺や掘立柱建物を構成するピットから出土した遺物（第9・10図）

SB002・003・006：他の建物から離れ、調査区北西に位置する建物（群）であり、周辺から岩ノ原①期とした土器群が出土している。建物も岩ノ原①期と考える。

SB055：第3図2～4がP07、3がP18から出土している。P07の覆土はII類であるが、遺物の出土した層位は不明である。P18の断面は不明。土器類の出土量は比較的多い。1で述べた通り、岩ノ原②期土器群である。

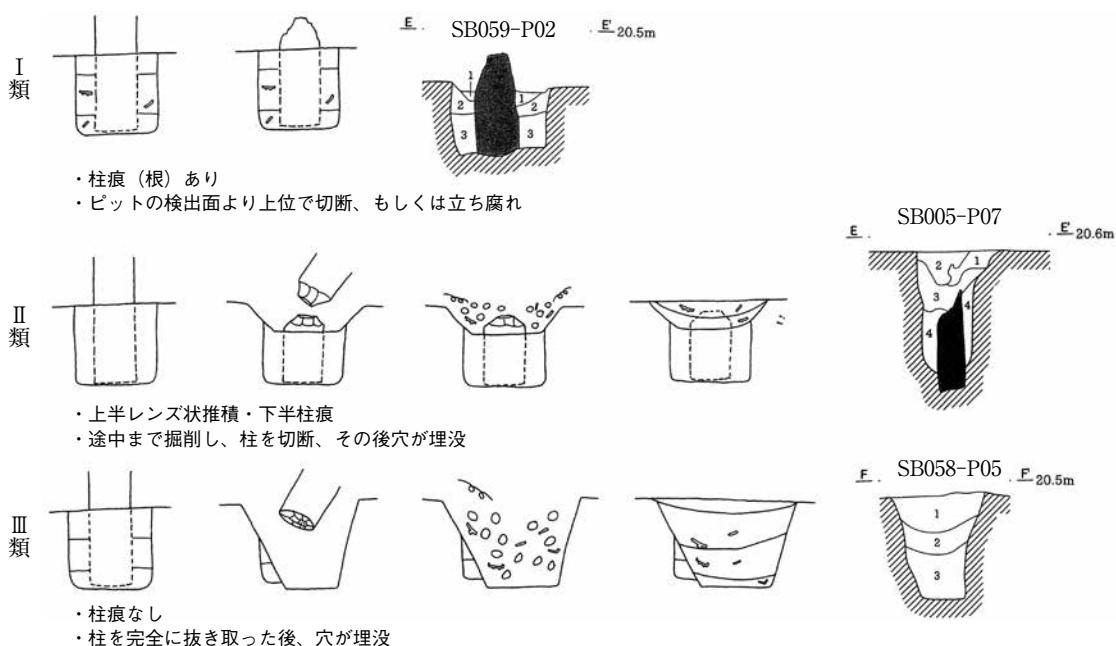
SB050：P05から須恵器杯蓋が出土している（1）。1は胎土C3類であり小田編年3期の滝寺11号窯に類例があり、岩ノ原③期と考える。P05の覆土はI類の可能性が高いが、II類の可能性もある。

SB137：P03（13・14）・P04（15）・P08（16）から土器が出土している。最新の遺物はP04から出土した15の土師器無台椀と考えられ、岩ノ原④期のものであろう。P03・04の覆土はI類である。

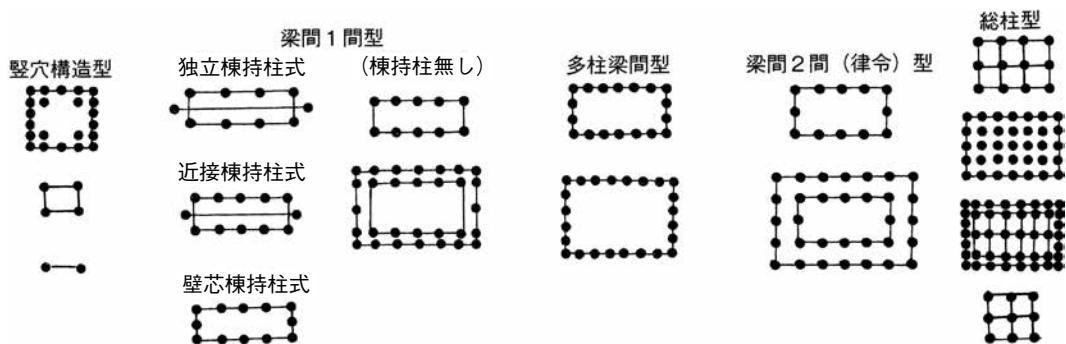
SB059：P09から須恵器無台杯（9）、土師器無台椀（10）が出土している。9は胎土C3類であり小田編年4期の大貫1号窯等に類例がある。10は岩ノ原④期とした土師器無台椀よりも底径がやや大きく器高が低い。ともに岩ノ原③期であろう。P09の覆土はIII類である。

SB143：P03から土師器無台椀が出土している（17）。17は底径が大きく器高が低い。岩ノ原④期の土師器無台椀より古相であり岩ノ原③期と考える。P03の覆土の状況は不明。

SB058：P04から胎土B類の須恵器無台杯（6）、P05から土師器無台椀（7・8）が出土している。



第7図 ピットの分類



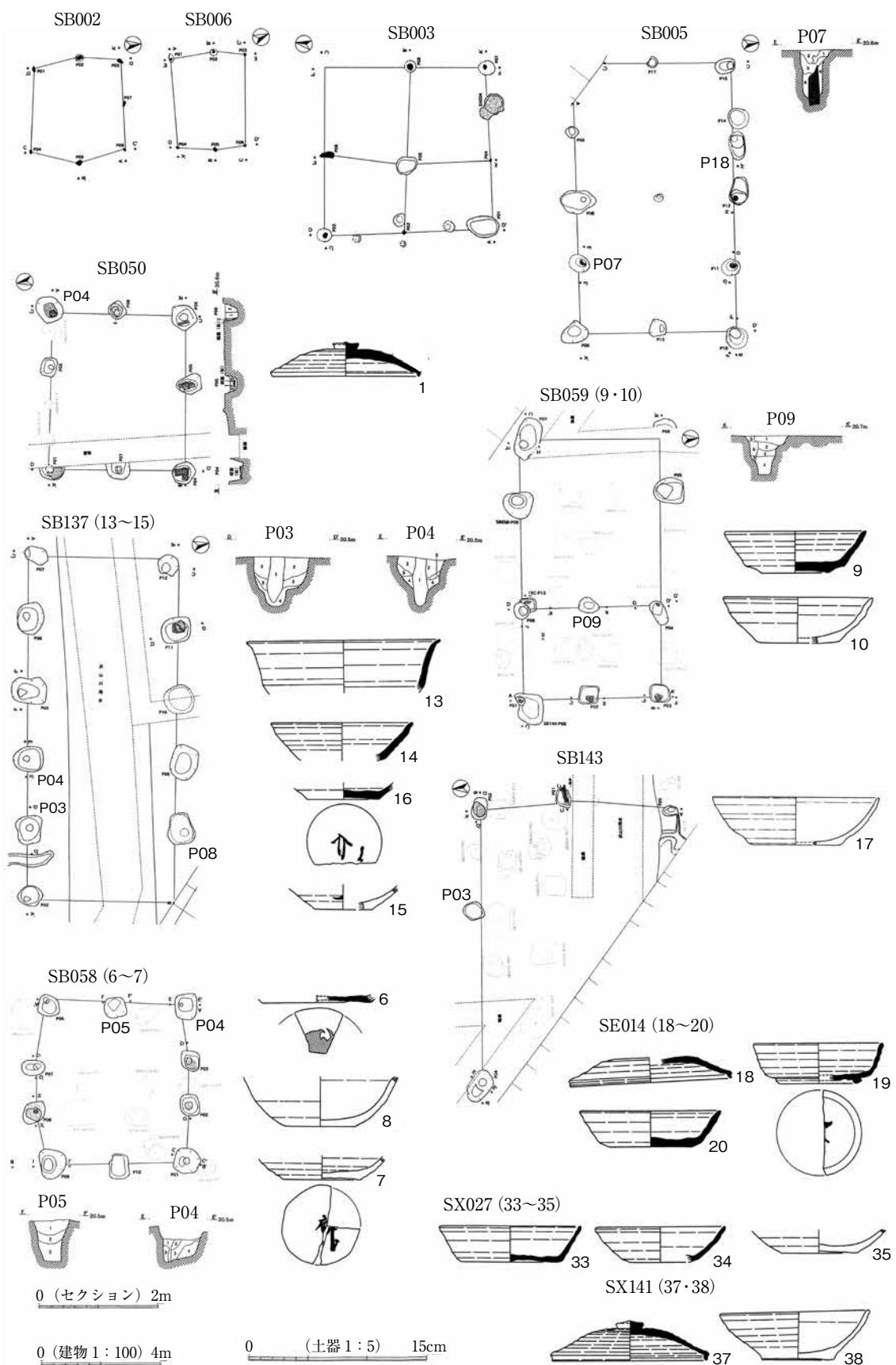
第8図 掘立柱建物 分類図(官本2002を改変)

第3表 岩ノ原遺跡の掘立柱建物

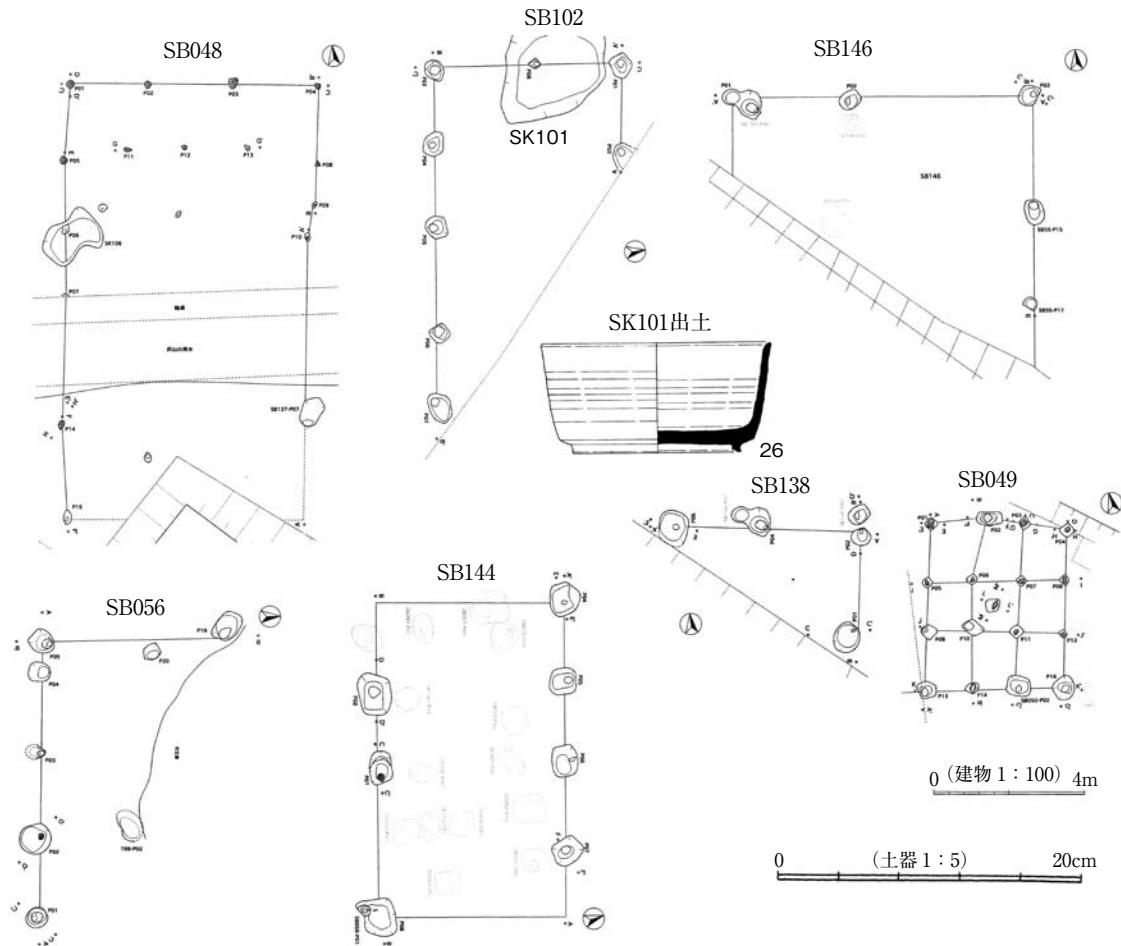
建物名	分類	位置	規模		面積 (m ²)	方位	切り合い (新旧)	土器の 時期	時期	備考
SB002	独立棟持柱式	4~5C	1×2		3.03×2.85	8.69	N~80° ~W		①	①
SB003	総柱型	5~6C	2×2		5.52×5.54	30.25	N~83° ~E		①	①
SB006	独立棟持柱式	4B	1×1		3.01×2.38	7.23	N~66° ~W		①	①
SB055	壁芯棟持柱式 18B・17~19C	1×4	5.20×9.00		46.80	N~86° ~W		②	②	土器は覆土IIのビットから出土
SB056	梁間2間型× 壁芯棟持柱式	18~19B	2×3以上		4.30×7.20以上	30.96以上	N~86° ~W		②	SB055と柱筋がおむね一致
SB102	壁芯棟持柱式	14~15B	1×4		4.96×8.96	44.44	N~83° ~W		②	柱穴を切る土坑から岩ノ原②期の土器が出土
SB144	梁間1間型	14~15C	1×4		4.98×8.28	41.23	N~72° ~W	SB144→ SB059	②	土器無し、SB059は岩ノ原③期の土器出土
SB049	総柱型	13AB	3×3		3.67×4.34	15.90	N~17° ~E	SB049→ SB050	②・③	土器無し、SB050は岩ノ原③期の土器が出土
SB048	多柱梁間型	15BC~16C	3×5		6.56×11.5	75.44	N~08° ~E	SB048→ SB137	③	土器無し、SB137は岩ノ原④期の土器が出土
SB059	梁間2間型× 壁芯棟持柱式	14CD~15C	2×3		4.52×8.55	38.48	N~84° ~W	SB059← SB144	③	土器が出土した柱穴の覆土はIII
SB146	梁間2間型?	17BC~18C	2×3以上		7.92×5.51	21.82以上	N~05° ~E		③	土器無し
SB143	独立棟持柱式	14CD~15C	1×3以上		6.44×9.12以上	58.73以上	N~83° ~E		③	③・④
SB050	梁間2間型× 壁芯棟持柱式	13~14B	2×2		4.55×5.21	23.71	N~78° ~W	SB050← SB049	③	③・④ 土器は覆土IかIIのビットから出土
SB058	梁間2間型× 壁芯棟持柱式	14~15C	2×3		4.58×5.39	25.54	N~09° ~E		③	④ 土器がは覆土IIIのビットから出土
SB137	梁間1間型	15BC~16C	1×5		5.00×11.50	57.50	N~76° ~W	SB137← SB048	③	④ 土器は覆土Iのビットから出土
SB138		17C	2×1以上		488以上×2.62以上	12.74以上	N~79° ~W		④	土器無し

6は底部の器壁が薄く、岩ノ原④期であろう。7・8も岩ノ原④期であろう。P04・05とも覆土はIII類である。

SB102: P06から須恵器甕が出土しているが、時期を限定するのが難しい。P08を切る土坑SK101からは須恵器有台杯(26)が出土している。胎土C3類であり、小田編年2期の滝寺13号窯に類例がある。岩ノ原②期のものと考える。



第9図 岩ノ原遺跡の掘立柱建物と出土土器(高橋ほか2008より作成)



第10図 岩ノ原遺跡の掘立柱建物と出土遺物(高橋ほか2008より作成)

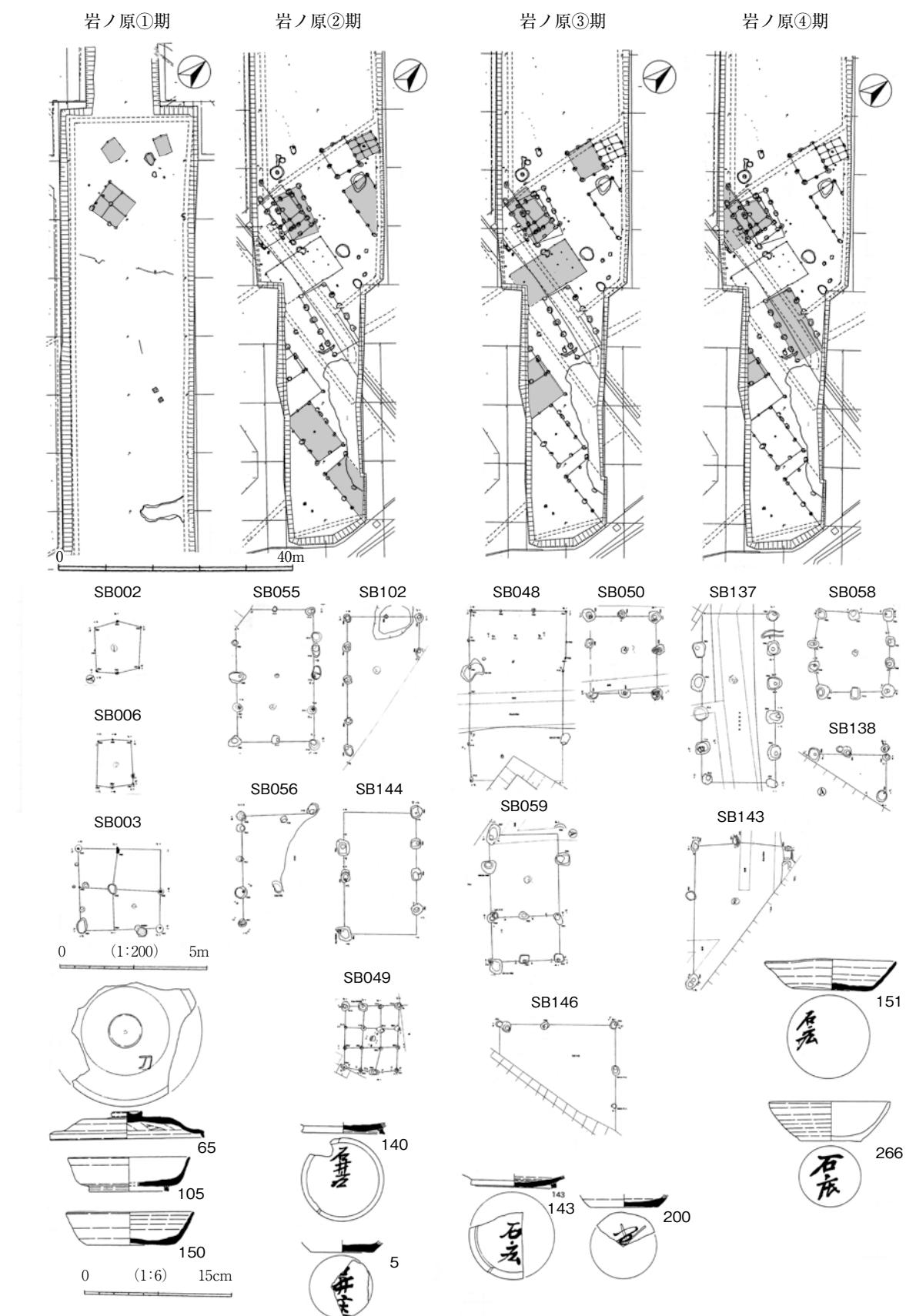
その他：SB049 から土師器片、SB056 から土師器片・須恵器片、SB144 から土師器片、SB146 から土師器片が出土しているが時期を決めるのが難しい。ただし、SB144 は岩ノ原③期の遺物を出土したSB049 に切られる。SE014 からは胎土 C3 類の須恵器杯蓋（18）・有台杯（19）、胎土 B 群の無台杯（20）が出土している。20 は底部の器壁が厚く、大部の開きが比較的大きい。今池 SD201 出土土器に類例がある。今池 SD201 出土土器は坂井編年のV期、筆者の編年のV 2期の資料である。他の須恵器もこれに近いものであろう。SE014 出土土器は岩ノ原③期を中心とする時期と考える。SX027・SX141 出土土器も岩ノ原③期を中心とする時期のものであろう。

(3) 遺構の変遷

これまでの検討を踏まえ遺構の変遷案を示す（第11図）。時期区分・年代は1で示したものに従う。また建物の分類は第9図に従う。

岩ノ原①期（8世紀第3四半期～第4四半期）：調査区北西部のSB002・003・006が当期の建物と考える。小型の棟持柱式建物2棟（SB002・006）と総柱建物1棟（SB003）から構成される。最大の建物はSB006で面積は30.25m²である。

岩ノ原②期：ピットⅡ類の覆土中から岩ノ原②期の土器が定量出土したSB055、SB055と柱筋がおおむね一致するSB056、覆土Ⅲ類のピットから岩ノ原③期の土師器・須恵器が出土したSB059に切られる



第11図 岩ノ原遺跡の掘立柱建物の変遷案(高橋ほか2008より作成)

SB144、岩ノ原②期の須恵器を出土したSK101に切られるSB102の4棟から構成される時期。覆土ⅠもしくはⅡのピットから岩ノ原③期の須恵器が出土したSB050に切られるSB049も当期の可能性がある。SB055・SB056・SB102・SB144の4棟はいずれも40～45m²の梁間1間型建物（棟持柱式含む）である。「石井庄」墨書土器は、SB102・144周辺でも見られるが、SB055・056周辺から比較的まとまって出土している。

岩ノ原③期：覆土Ⅲ類のピットから岩ノ原③期の須恵器・土師器が出土したSB059、SB059と柱筋が概ね一致しL字の配置となるSB048、岩ノ原②期の建物と考えるSB055と岩ノ原④期の建物と考えるSB138と重複するSB146の3棟から構成される時期。覆土ⅠもしくはⅡのピットから岩ノ原③期の須恵器が出土したSB050、SB50に切られるSB049、岩ノ原③期の土器が出土したSB143も当期の可能性がある。建物ではないがSE014も当期のものの可能性が高い。最大の建物はSB048で平面積75.8m²、建物の型式は多柱梁間型（註7）である。

岩ノ原④期：覆土Ⅰ類のピットから岩ノ原④期の土師器が出土したSB137、SB137と柱筋がおおむね一致し、L字の配置となる可能性があるSB138、覆土Ⅲ類のピットから岩ノ原④期の土師器・須恵器が出土したSB058から構成される時期。覆土ⅠもしくはⅡのピットから岩ノ原③期の須恵器が出土したSB050、岩ノ原③期の土器が出土したSB143も当期の可能性がある。最大の建物はSB137であり平面積は57.5m²、建物の型式は梁間1間型の可能性が高い（註8）。

3 岩ノ原遺跡の性格

以上のように岩ノ原②期～④期の岩ノ原遺跡では、平面積45～75m²の中心的な建物に、3～4棟のこれより小規模な掘立柱建物が伴う建物群が存在した。中心的な建物は近接棟持柱式（岩ノ原②期）、多柱梁間型（岩ノ原③期）、梁間1間型（岩ノ原④期）などいずれも伝統的な建物型式で、岩ノ原③・④期（おおむね9世紀第2四半期～第3四半期）はL字の建物配置がみられた。また、岩ノ原②・③期（8世紀末～9世紀前半）には3×3間（15.9m²）の比較的規模の大きな倉庫を伴っていた。

これらの建物群は、周辺からは「石井庄」・「石庄」などの墨書土器が定量出土しており、高橋が報告書中で明言しているように、8世紀中葉に成立した東大寺領石井庄の庄所と考えてよい。建物がL字に配置される可能性がある点も、北陸の初期庄園遺跡を検討した吉岡の論考〔吉岡1996〕に従うならば、調査で検出された建物群が庄所であったことを補強するものであろう。遺跡の立地も儀明川に近接し、関川に通じる内水面交通を確保しうる点も、これまで発掘調査で明らかになった初期庄園の庄所と共通する点である。しかし富山県入善町じょうべのま遺跡・富山県高岡市常国遺跡・石川県金沢市上新屋遺跡・石川県白山市横江庄遺跡などの、これまでの発掘調査で明らかにされている中央官寺庄園の庄所の中心的な建物が、ほぼ例外なく平庇を持ち、庇を含めた面積が100m²を超えており、岩ノ原遺跡で検出された建物はこれに比べ小規模である。

岩ノ原遺跡で検出された中心的な建物が、中央官寺の庄所としては小規模意である理由を考えるときに、参考となるのは「石井庄」・「石庄」と記された墨書土器の出土と井上慶隆の論考〔井上1973〕である。井上は太治五年（1130）「東大寺諸荘文書并絵図等目録」に「石井庄字吉田」とあることに着目し、天暦四年（941）「東大寺封戸荘園并寺用帳」に現れ、や長徳四年「東大寺領諸国荘家田地目録」に以降の史料に現れない吉田庄が、石井庄と近接した場所にあり、荒廃後に石井庄に統合されたとしたが、卓見であろう。岩ノ原遺跡から庄園名が記された墨書土器が出土する理由に、近接した場所に石井庄の庄所と吉田庄の庄所が存在し、かつ両庄の在地での經營には同一の集団が深く関わっていたため、所属を明確にするた

めに具体的な庄名が記されたと考えてはどうだろうか（註9）。このように考えた場合、石井庄・吉田庄の二つの庄園（あるいは真沼庄をめた三つの庄園）を統括するより上位の施設が近隣に存在し、そのため岩ノ原遺跡で検出された石井庄の庄所が小規模となった可能性を考えてもよいだろう。

4 岩ノ原遺跡周辺の古代遺跡

岩ノ原遺跡周辺は北陸新幹線や上信越自動車道建設に伴い多くの古代の遺跡が調査された。以下では、主要な遺跡の時期や主な遺構の構成を個別に確認していきたい。なお、以下の記述では岩ノ原①～④期以外の時期も対象とするため、土器の時期区分は筆者の編年〔春日1999〕を用いる。

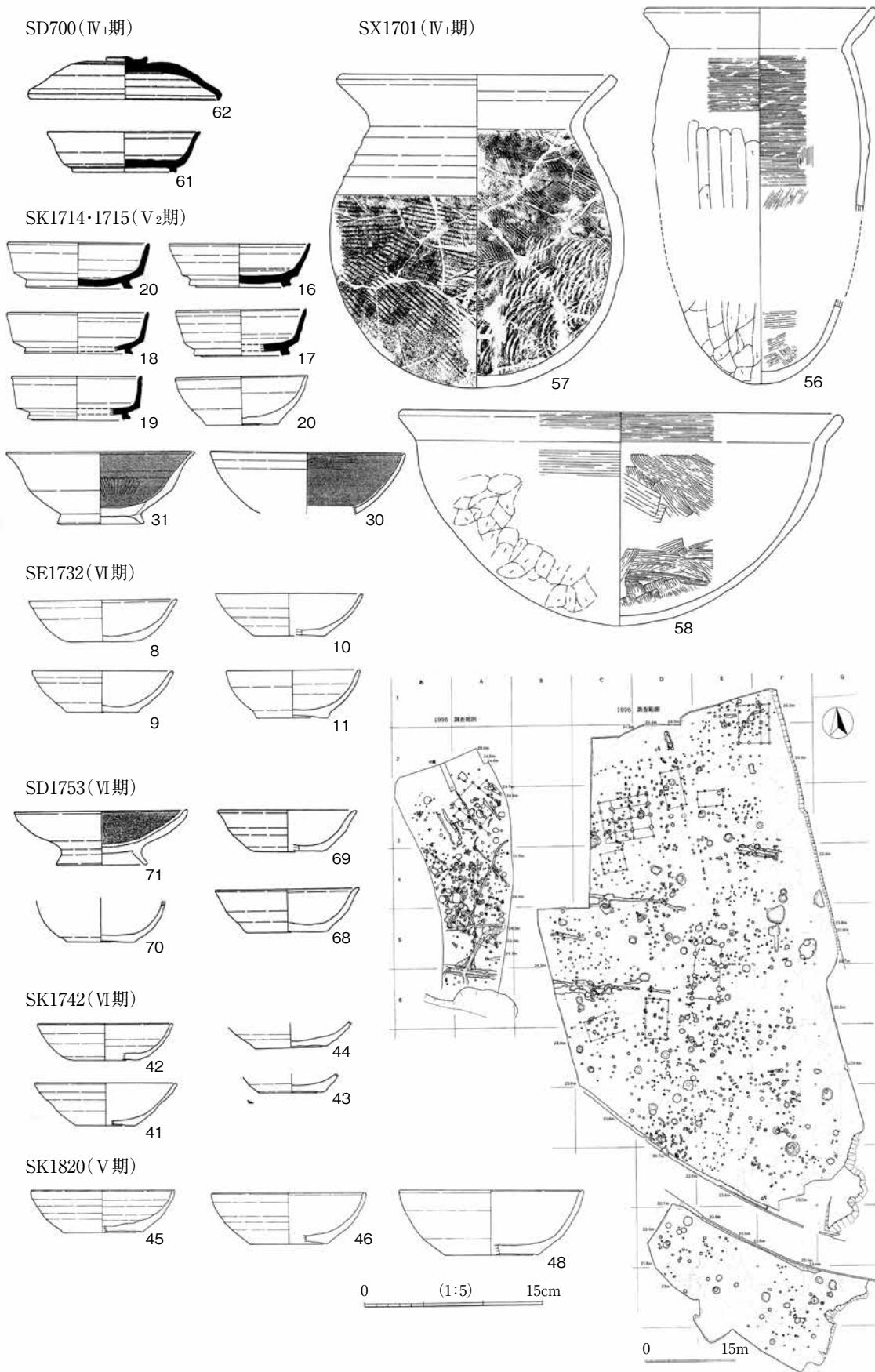
海道遺跡 [高橋2005]（第12図） 岩ノ原遺跡の西方約600m、儀明川左岸の尾根に挟まれた谷部に位置する。古代から中世の遺跡であり、古代の土器はIV期（SD700・SX1701）、V期（SK1714・1715・SK1820）、VI期（SE1732・SK1742・SD1753）の遺物が出土している。掘立柱建物・井戸・土坑・底面や側壁が焼けた土坑（SX1701）・溝等が検出された。掘立柱建物の所属時期は判断が難しいが、1996年度調査区からは古代の土器が多く出土しており、古代に属するものが多いと考える。梁間一間型建物や棟持柱式建物が定量確認できる。古代の掘立柱建物の方位は30°～50°西（もしくは東）に振れるものが多い。SX1701は土師器焼成遺構の可能性がある。

蛇谷遺跡 [立木2005]（第13図） 岩ノ原遺跡の西方約600m、海道遺跡の南側約300m、儀明川右岸の丘陵上に位置する遺跡。旧石器時代・縄文時代・古代から中世の遺跡であり、古代の遺構から出土した土器にはV期（SI417）・VI期（SK454・SK422）、VII期（SI414）があり、包含層出土遺物のなかにはIV2・3期頃まで遡る可能性がある土器（426・430・432）も確認できる。掘立柱建物・周溝を持つ竪穴建物・溝・土坑などが検出された。VII期には方形のお堂風の建物や油煙痕を持つ土師器小椀・無台椀が定量出土し、三足釜などの特殊な遺物も定量出土しており、仏教関連施設が存在した可能性がある。V期に建物の主軸方位は約70°西に振れ、VII期・中世の建物の主軸は方位におおむね一致する。

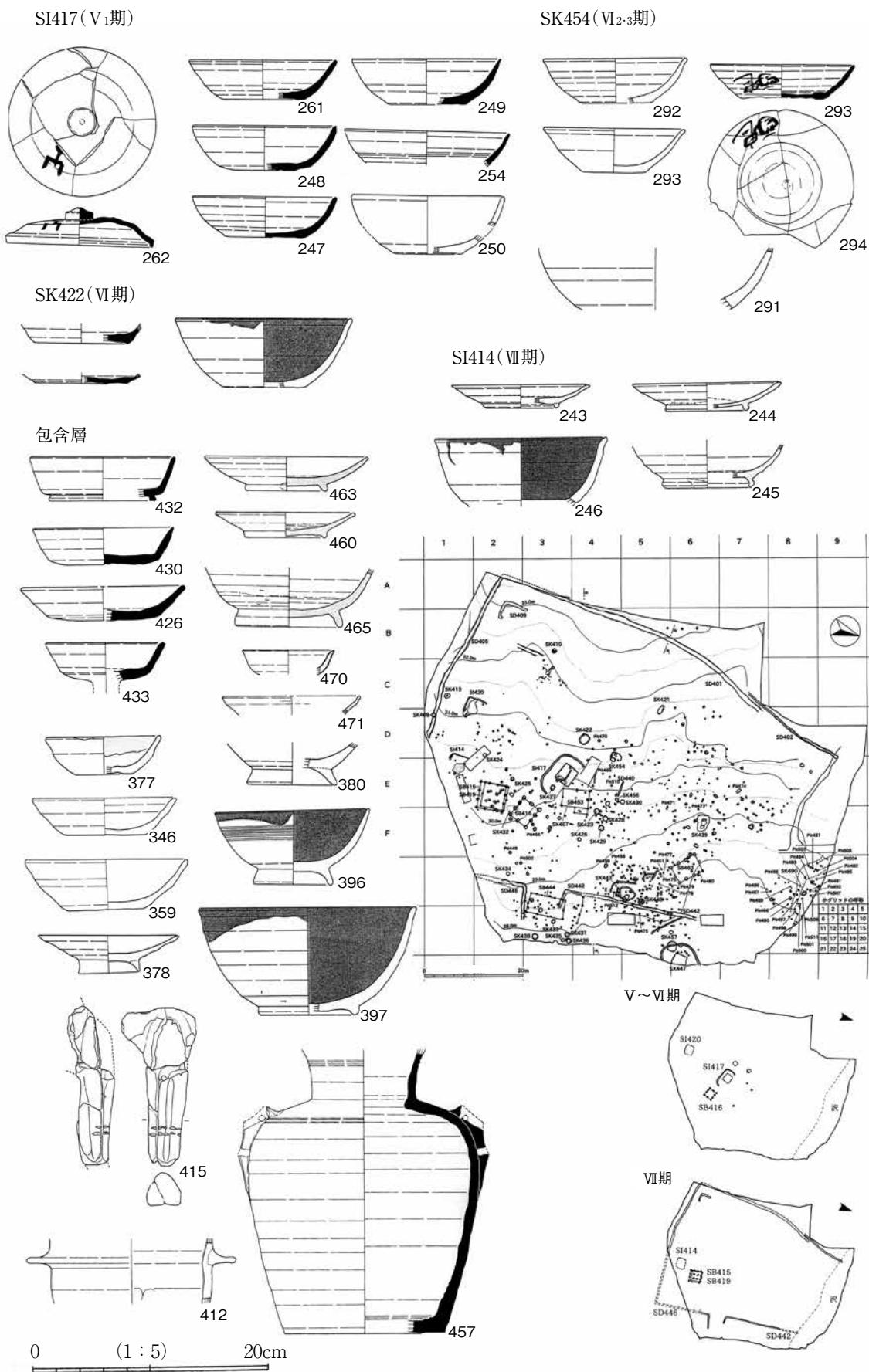
北前田遺跡 [金内ほか2008]（第14図） 岩ノ原遺跡の南西約2kmの沖積地に位置する。古墳時代前期と古代の遺跡であり、古代はI期・III期の遺物が少量、VI期の土器が定量出土している。掘立柱建物6、土坑・溝などが検出されている。掘立柱建物はいずれも30m²以下の小規模なもので、建物の主軸は方位にほぼ一致する。

北新田遺跡 [金内ほか2008]（第15図） 岩ノ原遺跡の南西約2.5kmの沖積地に所在する。古墳時代前期から中世の遺跡で、竪穴建物21・掘立柱建物36・井戸・土坑が検出されており、竪穴建物・掘立柱建物が比較的密集して分布している。古代の土器は、I期とIV・V期が多く出土しており、II～III期は少ない。古代の遺構の多くはI期とV期のものであろう。I期は竪穴建物を中心に、少量の掘立柱建物が伴う集落であり、最大の建物は48.6m²の竪穴建物（SI570）であり、30m²以下の建物が多い。IV・V期は掘方柱建物を主体とし少量の竪穴建物が伴う集落である。最大の建物は41.12m²の掘立柱建物（SB938）で、30～15m²前後の建物が多い。方位に概ね一致する竪穴建物や掘立柱建物の多くはV期と思われる。報告者の金内は、岩ノ原遺跡と近い位置に所在することや存続する時期が重複することから、石井庄と関連することや岩ノ原遺跡よりも小規模な建物が多いことを指摘している。（註10）

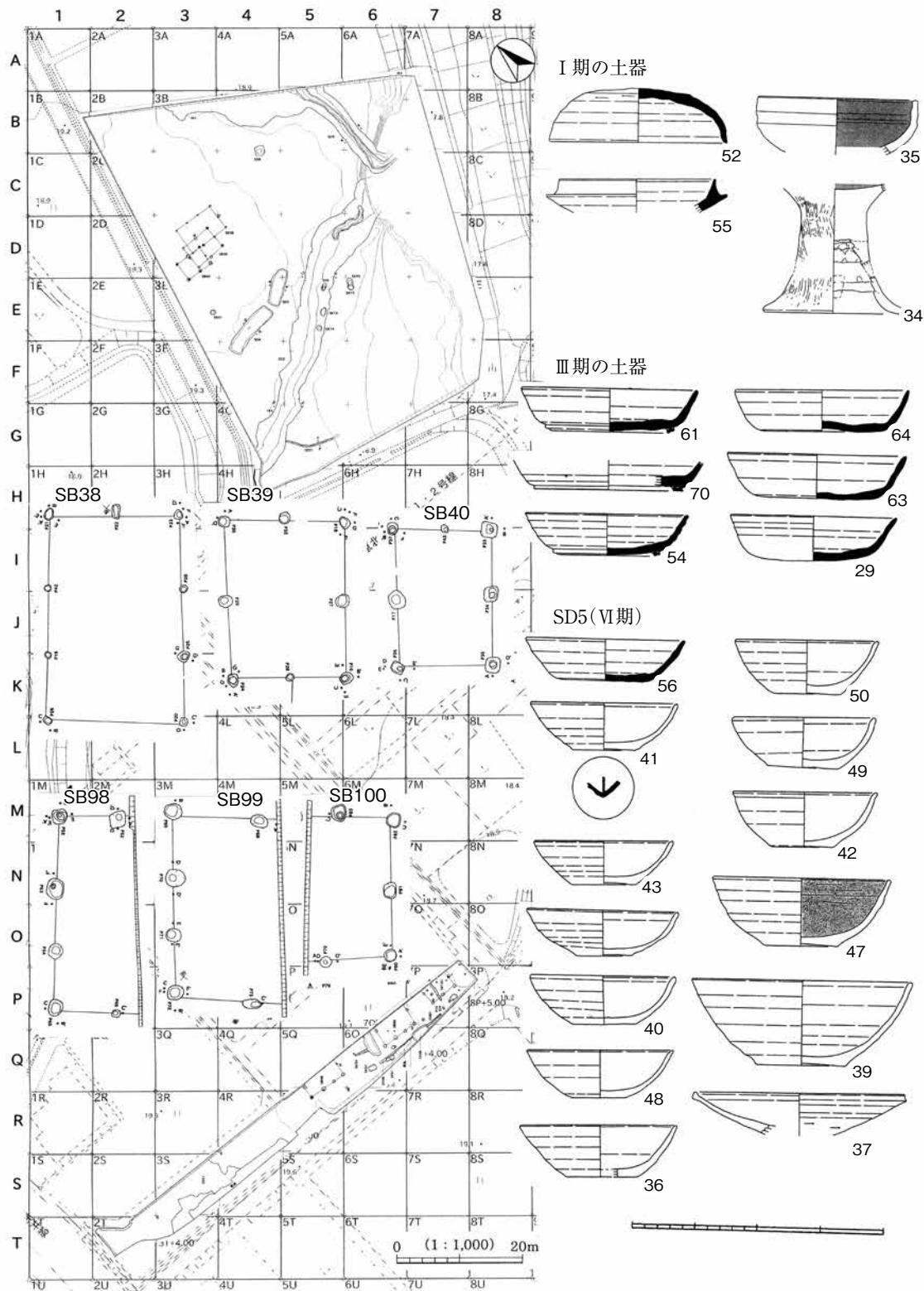
細田遺跡 [尾崎2005]（第16・17図） 岩ノ原遺跡の南東約2km、青田川の左岸の丘陵裾付近に立地する遺跡で、弥生時代末～古墳時代・古代の遺跡である。15O・15P・15Q北側土器集中区の集中区の遺物はIV2・3期を中心とするが、III期に遡る可能性があるもの（232・246）、V～VI期に下るもの（237・



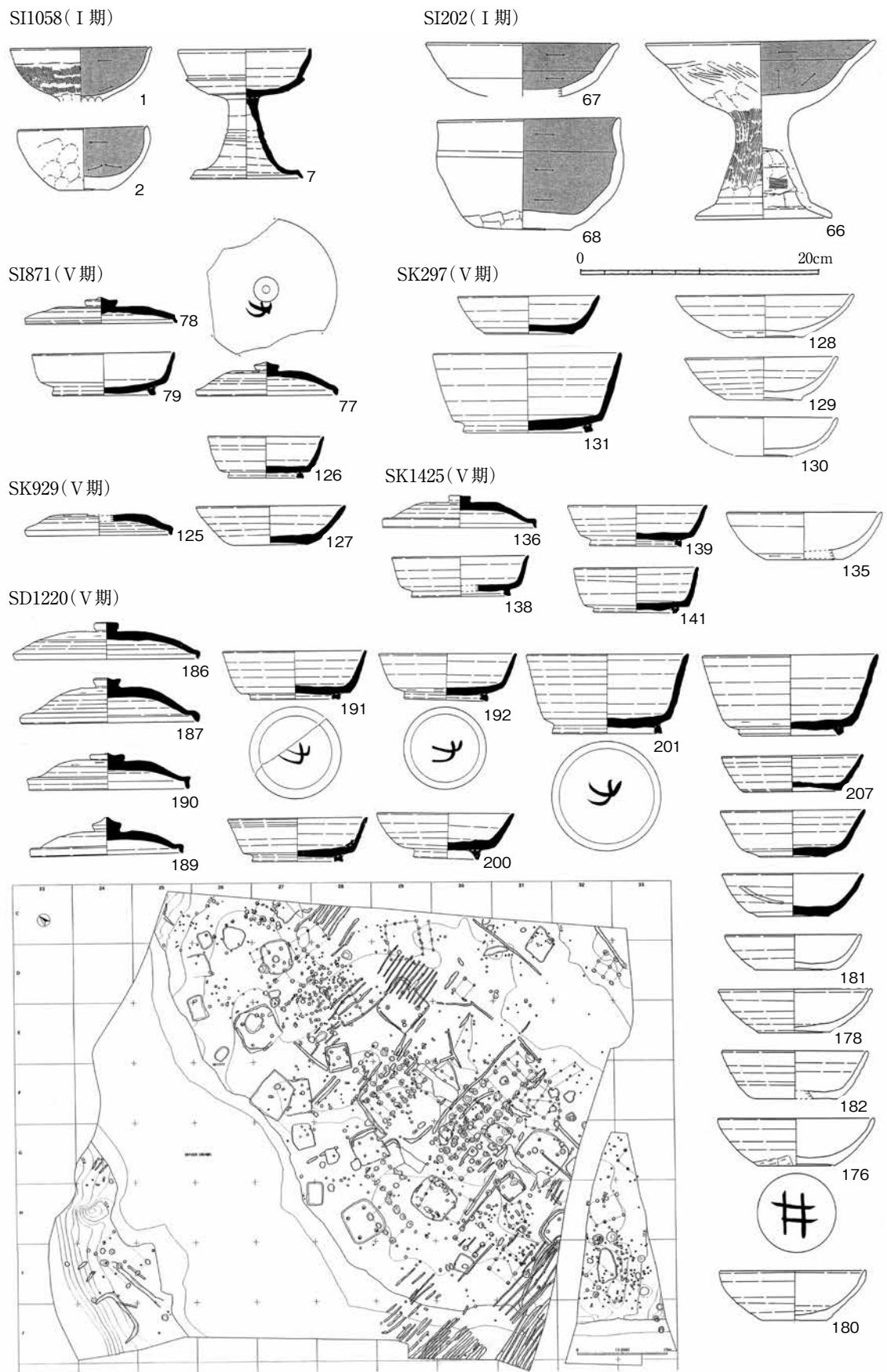
第12図 海道遺跡の遺構と出土土器(高橋ほか2005より作成)



第13図 生它谷遺跡の遺構と出土土器(土橋ほか2005より作成)

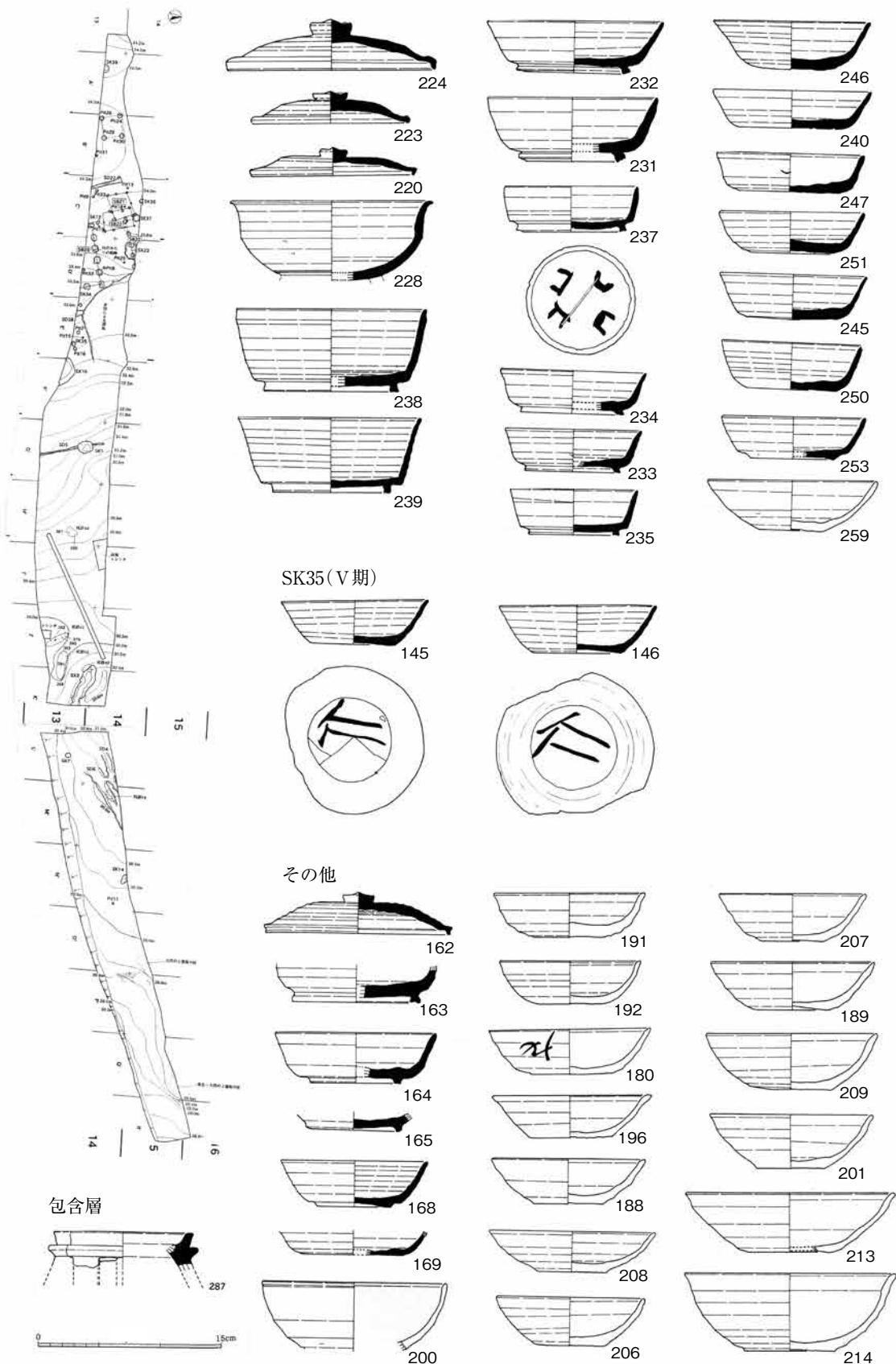


第14図 北前田遺跡の遺構と出土土器(金内ほか2008より作成)

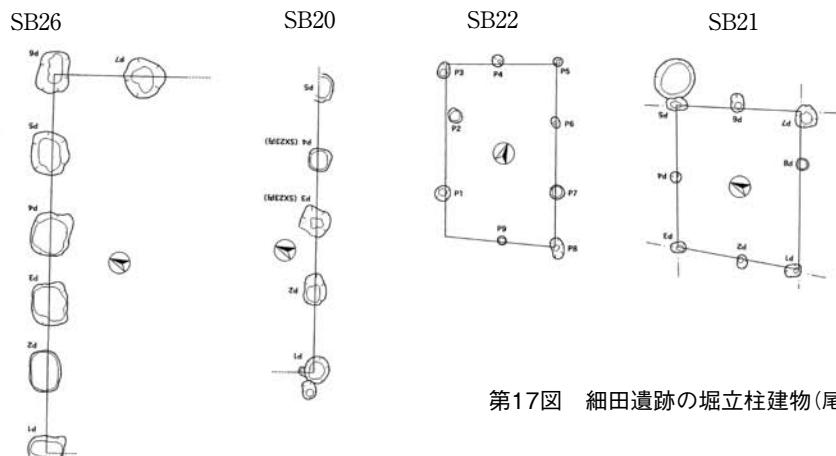


第15図 北新田遺跡の遺構と出土土器(金内ほか2008より作成)

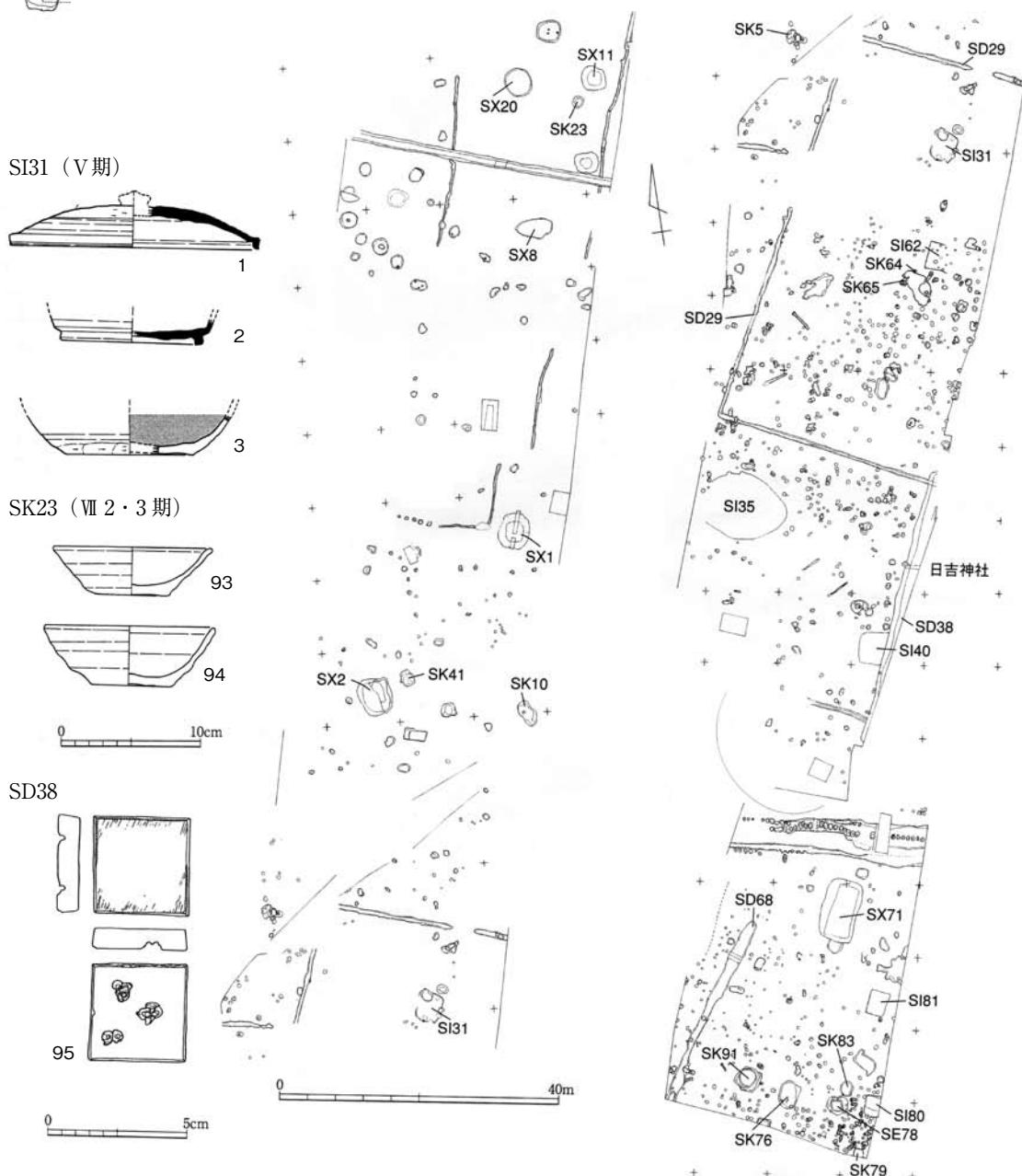
15O'・P'・Q' 北側端土器集中区(IV～V期)



第16図 細田遺跡の遺構と出土土器(尾崎ほか2005より作成)

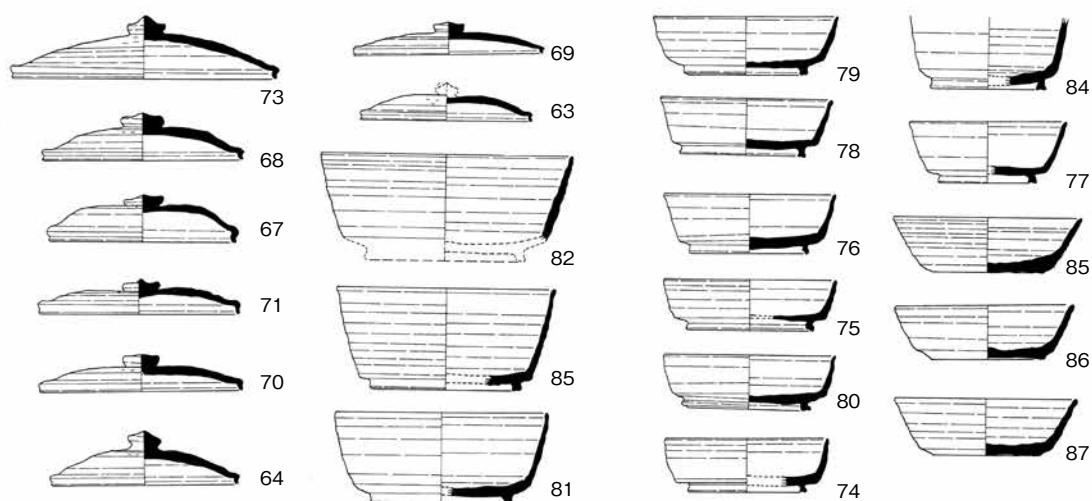


第17図 細田遺跡の堀立柱建物(尾崎200より作成)



第18図 新田畠遺跡の遺構と出土遺物(笛沢2003より作成)

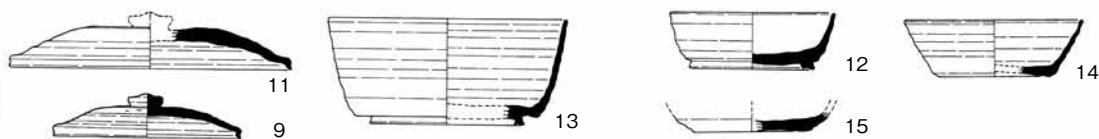
SK65 (IV 2期)



SK41 (IV 2～IV 3期)



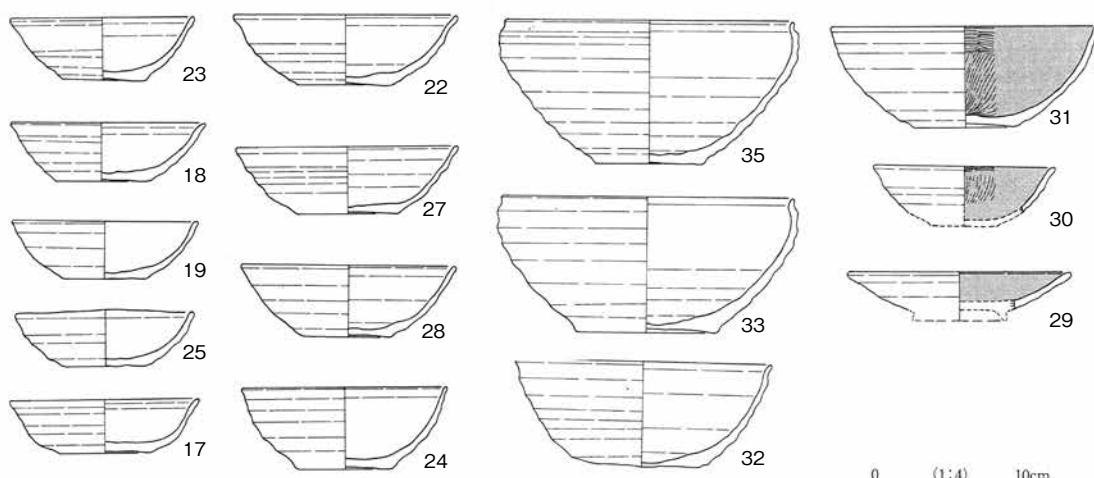
SI40 (V 1期)



SK5 (V 2期)



SD38 (VII 1期)



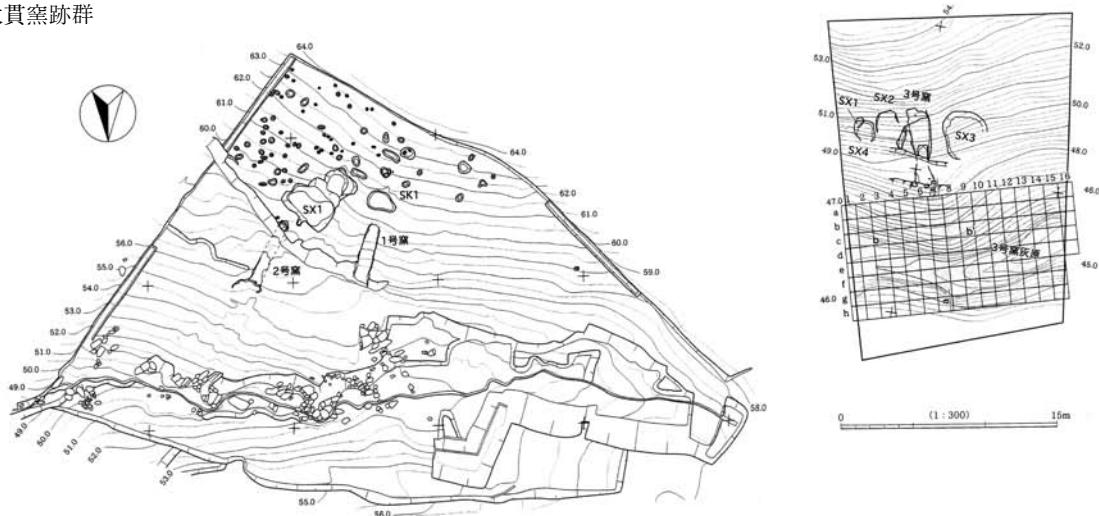
0 (1:4) 10cm

第19図 新田畠遺跡出土土器(笹沢2003より作成)

滝寺窯跡群



大貫窯跡群



第20図 滝寺・大貫須恵器窯跡群(小田ほか2006より作成)

235・253・259) も確認できる。SK35 は V 期、SD4 は VI 期を中心とする時期のものであろう。古代の遺構には掘立柱建物・土坑・溝などが検出されている。桁行 5 間 (SB26) と桁行 4 間以上 (SB20) の比較的大型建物が 2 棟柱筋を揃えて検出されている。報告者の尾崎は、IV 期に成立することや建物の規模・円面覗などの出土ながら、有力農民層の私的な開発の拠点と位置づけ、初期荘園との関連を指摘している。

新田畑遺跡 [笹沢 2003] (第 18・19 図) 岩ノ原遺跡の北側約 1.3km 、儀明川左岸に所在する。縄文時代・古代・近世の遺跡で、IV 2 ~ 3 期 (SK65・SK41) 、 V 期 (SK5・SI31・SI40) 、 VII 期 (SD38) の遺物が出土している。竪穴建物 5 、土坑・溝等が検出された。竪穴建物の多くは IV ・ V 期のものである。 SD38 か

らは石帶や、土師器鉄鉢が出土していることから、Ⅶ期には有力者が遺跡内に存在した可能性がある。

関川左岸の須恵器窯（第20図） 岩ノ原遺跡の南約2.5kmにはⅡ2期の下馬場窯跡〔小島1989〕、北西約600mにはIV1期の向橋窯跡〔高田市1967・笹沢2003〕、北西約2.5kmにはIV2～V2期の滝寺窯跡群・大貫窯群〔小田ほか2006〕が確認できる。滝寺窯跡群・大貫窯群は約600mしかはなれておらず、一連の須恵器窯と考えられており、IV2期～V2期の間に16基（以上）の須恵器窯が存在した。下馬場窯跡（群）や向橋窯跡と比較すると規模の大きな須恵器窯と考えられる。関川左岸の丘陵ではⅡ2期に須恵器生産が確認できるが、Ⅲ期の須恵器窯は不明でIV2期以降生産が拡大するものと考える。

これらの遺跡の動向をまとめると表4となる。岩ノ原遺跡周辺ではI期に比較的規模の大きい集落遺跡（北新田遺跡）が存在するが、II・III期の遺跡は希薄で、岩ノ原遺跡が成立・拡充するIV期以降遺跡が増加し、周辺の開発が活性化したと考える。これらの遺跡の多くは岩ノ原遺跡が衰退するVI期に衰退する。また、IV期以降の建物には、岩ノ原遺跡の多くの建物と同様に主軸が方位と概ね一致する建物（方位軸建物〔田嶋1996〕）が一定量（北新田遺跡・北前田遺跡など）あり、ある程度の範囲が統一的な地割のもとに開発が進められた可能性がある。またIV2期には滝寺・大貫地区に、関川左岸の丘陵にはこれまで見られなかつたような大規模な須恵器窯が成立した。これらは相互に関連する事象であり、石井庄・吉田庄の在地での経営や、岩ノ原遺跡周辺の開発、須恵器生産の活性化は同一の集団が主導した可能性がある。

おわりに

小稿で明らかとなったことはわずかだが、以下の内容を要約し、まとめとしたい。

- 1 岩ノ原遺跡の土器群を出土地点や墨書き土器の記載内容・字体に基づき岩ノ原①～④期の4期に区分し、既存の編年案との対応関係の検討し、暦年代を推定した。その結果、岩ノ原遺跡の成立（岩ノ原①期の暦年代）が8世紀第3四半となり、報告書での年代観を約四半世紀遡らせる私見を示した。
- 2 1と関連し、報告書では9世紀第2四半期～第3四半期に限定されるとされた「石井庄」・「石庄」な

第4表 岩ノ原遺跡周辺の主要遺跡の動向

遺跡/時期	春日1999	I			II			III			IV			V			VI			VII		
		1	2	3	1	2	1	2	1	2	3	1	2	3	1	2	2・3	1	2	3		
本稿																						
集落	岩ノ原遺跡							◎	◎	◎	◎	石井庄」墨書 岩井庄庄所	石庄墨書 方位軸建物	→	◎	◎	→					
	新田畠遺跡								◎	◎					◎	◎	◎	◎				
	海道遺跡							◎	△	○					○	△						
	蛇谷遺跡									△	○				○	○	○	○	○	○		
	細田遺跡							△	△	○	○				○	○						
	中田原遺跡								?	○	○				○	○	○					
	野畔遺跡									○	?											
	北前田遺跡	△			◎											◎	方位軸建物					
	北新田遺跡	◎	?		○				○			◎										
	荒町南新田	◎			○				◎			◎										
窯跡	用言寺遺跡				△			○		△	△				○	○						
	下馬場窯跡群				◎	?																
	向橋窯跡							◎														
	滝寺窯跡群								◎	◎	◎	◎										
	大貫窯跡群											◎	◎									

*◎・○・△は遺跡の盛衰を現すイメージ ◎>○>△>?>空欄

どの墨書き土器の一部が8世紀末～9世紀初頭まで遡る可能性を指摘した。また、8世紀末～9世紀初頭は「石井庄」「石井」と主に記載されていた墨書き土器が、9世紀前半から後半には「石庄」変化する可能性が高いことを示した。

3 土器編年案をもとに、遺構（掘立柱建物）の変遷を検討した。検討の結果、岩ノ原②期～④期では、平面積45～75m²の中心的な建物に、3～4棟のこれより小規模な掘立柱建物が伴う建物群が存在した。また、岩ノ原③・④期（9世紀前半～後半）には中心的な建物とこれよりやや小規模な建物をL字に配置しているものと考えた。これは岩ノ原遺跡を天平勝宝五年（753）に成立した東大寺領石井庄の庄所であるとした高橋の指摘を補強するものである。

4 岩ノ原遺跡で検出された建物群を東大寺領石井庄の庄所とした場合、従来発掘調査で明らかとなった中央官寺庄園の庄所としては規模が小さいこととなる。この理由については、「石井庄」・「石庄」という具体的な庄園名を記した墨書き土器の出土と石井庄に近接して吉田庄が存在していたことを明らかにした井上慶隆の論考を参考にし、二つの庄園（を統括する施設）が近隣に存在し、そのために岩ノ原遺跡で検出された石井庄の庄所が小規模となったと推測した。

5 岩ノ原遺跡周辺の古代集落遺跡の動静を検討した。その結果、周辺には岩ノ原遺跡と同様に8世紀後半～9世紀に成立し9世紀後半頃衰退する例が多く確認できた。また須恵器生産も8世紀末～9世紀前半に拡大することを確認した。石井庄・吉田庄の成立、8世紀後半から9世紀初頭における岩ノ原遺跡周辺の遺跡の増加や須恵器生産の拡大は相互に関連するもので、これらは同一の集団により主導されたものと考えた。

小稿がなるにあたって、以下の方々から様々なご教示をいただきました。文末ながら記して感謝いたします。

相沢 央・伊藤秀和・飯坂盛泰・石川智紀・岡本範之・北野博司・ 笹沢正史・澤田 敦・高橋保雄・滝沢 規朗・金内 元・野水晃子・山崎忠良

(平成22年2月 脱稿)

註

註1 平成20年度にも南東の近接する地区で約1,250m²の発掘調査が行われ、古代から中世の遺物が出土し、竪穴建物3、掘立柱建物36、井戸19、土坑・井戸などが検出された〔秋山・金内2009〕。遺物には「庄」の墨書き土器が記された須恵器有台杯がある〔岡本2009〕。

註2 光谷は「年輪年代測定が行われた板材には辺材部が1.7cm残存して」おり、「樹齢300年以上のスギの平均辺材幅4.5～5cmである」り、「板材に5cmの辺材幅があったと仮定すると、3.3cm削られ」、「辺材部に占める平均年輪幅を1mmとすると、33層分の程度の年輪が加算」されることとなり、「775年あたり」という年代を導き出している。

註3 筆者のIV～VI1期の年代観については、百瀬正恒の批判がある〔百瀬2008〕。筆者は批判の内容が十分理解できなかった。また、百瀬はこの中で「須恵器の編年については原稿を用意しており」とも述べている。百瀬氏の批判に対する対応は「原稿」が公表された後に考えたい。小稿では従来の年代観を採用する。

註4 個々の遺物では3・9・107・120などの位置付けはかなり異なる。

註5 高梨清志は「小穴・ピット」≡「柱穴」とするのではなく、柱痕・柱根の有無や断面形・覆土の堆積状況などを吟味し、「柱穴」という用語を限定的に使用すべきであるとする〔高梨2004〕。筆者もこれに賛同する。覆土Ⅲ類のピットは厳密には柱穴ではないだろう。

註6 柱痕が斜めに入っていた場合は、柱の抜き取りを行わなかつたとしても、Ⅱ類の断面（図）となる場合がある。また、柱痕を外して断面図を作成した場合、柱の抜き取りが行われなくともⅢ類の断面（図）になる場合があるであろう。

註7 多柱梁間型建物は今池遺跡SB46・105〔坂井ほか1984〕、五反田遺跡平成16年度SB1〔渡辺2005〕など、IV～V期の大型掘立柱建物に使用される例が一定量存在する。

註8 中央に江戸時代に掘削された沢山川用水が掘りこまれている。梁間2間型・壁芯棟持柱式建物の可能性もあるが、

そうなった場合、梁間の柱間が狭すぎると考えた。

註9 平成21年に、平成18年の岩ノ原遺跡の調査区約50m南西の地点の発掘調査が行われ、「庄」と記された須恵器有台杯が出土した[岡本2009]。この須恵器有杯の時期は岩ノ原①期と考えられる。「石井庄」の墨書が「吉田庄」との混同を避けるために記されたと考え、「石井庄」「石庄」の墨書土器の出現が吉田庄の成立と関連すると考えるならば、吉田庄の成立は岩ノ原②期となるかもしれない。岩ノ原②期は8世紀末～9世紀初頭である。8世紀末・9世紀初頭は頸城郡に存在したもう一つの東大寺領莊園真沼(田)庄の史料上の上限(延暦八年(789))の時期である。なお、岡本2009では墨書は「莊」と報告されているが、「ヤマイダレの「庄」」とするのが妥当と考える。

註10 II～III期の建物が皆無ではないと考える。例えばSI931やSI848出土土器はII～III期の可能性があり、建物がこの時期となる可能性がある。

引用・参考文献

- 秋山泰利・金内元 2009「岩ノ原遺跡II」『新潟研磨増文化財調査事業団年報 平成20年度』新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰・野水晃子・山下研ほか 2007『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第171集 狐宮遺跡』新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 井上慶隆 1973「越後の条里制と石井庄の位置」『かみくひむし』第11号 かみくひむしの会
- 宇野隆夫 1991『律令社会の考古学的研究』桂書房
- 宇野隆夫 2006「官衙遺跡からみた横江庄遺跡」「東大寺領横江庄遺跡II」松任市教育委員会
- 宇野隆夫 2001『莊園の考古学』青木書店
- 荻野正博 1986a「初期莊園の成立と推移」『新潟県史』通史編1 原始・古代
- 荻野正博 1986b「東大寺領越後国石井庄の歴史」「山田英雄先生退官記念論集 政治社会史論叢」山田英雄先生退官記念会
- 岡本範之 2009「岩ノ原遺跡II」「埋文にいがた」66号 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎高宏 2005『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第152集 下馬場遺跡・細田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子 2006「第VI章まとめ 1A 土器の変遷」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子ほか 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川畑誠 1995「集落の様相からみた7世紀の社会」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1999「第4章古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実 2005「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について—「今池編年」「下ノ西編年」「山三賀編年」の検討を中心に」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 金内元 2008「出土土器の編年の位置」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡』新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金内元ほか 2008『潟県埋蔵文化財調査報告書第197集 北前田遺跡I・北新田遺跡I』新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 亀田隆之 1998「石井庄」『日本莊園史辞典』
- 小島幸雄・秦繁治・水沢省吾 1983「末野窯跡群」「保倉川流域」新潟県教委億委員会
- 小島幸雄 1989『下馬場古窯跡群発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小島幸雄・中西聰・ 笹沢正史 1996『新潟県上越市横曾根II遺跡ほか発掘調査報告書(横曾根II遺跡・横曾根III遺跡・上押出遺跡)』上越市教育委員会
- 小島幸雄・ 笹沢正史ほか 1987『保坂遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小島幸雄・ 笹沢正史ほか 1988『保坂遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1984『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1984「第VI章考察 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1988「律令期の須恵器の系譜－越後南西部における須恵器の系譜をめぐって」『高井梯三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』高井梯三郎先生喜寿記念論集刊行会編 真陽社
- 坂井秀弥 1999「第4章古代 第1節 総論」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 笹川修一 1995『岡原遺跡・大野遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 笹沢正史 1997「越後頸城群内の須恵器生産の推移と技術系譜の問題について」『北陸古代研究』第6号 北陸お古代土器研究会
- 笹沢正史 2002「上越地方最大の須恵器窯跡群－末野・日向窯跡群」『三和村史 自然・考古編』新潟県三和村
- 笹沢正史 2003a「第5章古代 第1節 時代概説」『上越市史』資料編2 考古 新潟県上越市

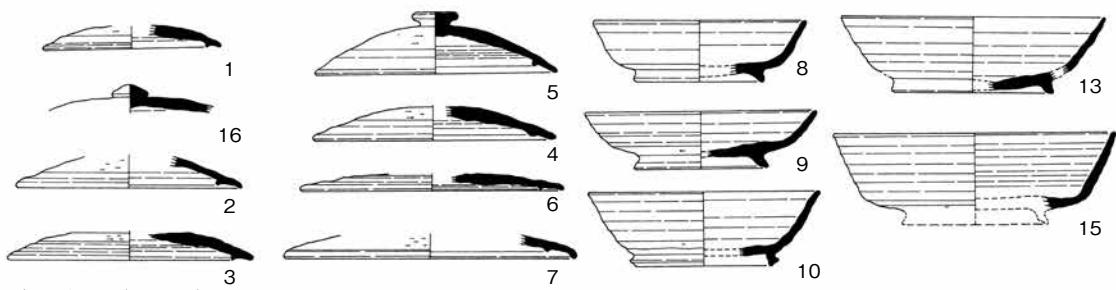
- 笛沢正史 2003b 「第5章古代 第2節 遺跡と遺物 10 越前遺跡」「同13 子安遺跡」「同26 新田畠遺跡」「同30 向橋古窯跡群」「同31 下馬場古窯跡群」『上越市史』資料編2 考古 新潟県上越市
- 沢田 敦・細井佳浩ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第154集 三角田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高島忠平・阿部義平・橋本 正・船崎久雄 1974 『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
- 田嶋明人 1983 「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌26 石川考古学研究会
- 田嶋明人 1988 「古代編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1996 「手取り扇状地に見る古代遺跡の動態」『東大寺領横江庄Ⅱ』石川県松任市教育委員会
- 高橋一樹 1999 「越後国高田保ノート」『上越市史研究』4号 上越市史編纂室
- 高橋 保 2005 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第150集 海道遺跡・大塚遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄・金内 元・田中一穂ほか 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2008 「遺構について」「石井庄と岩ノ原遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中一穂 2008 「岩ノ原遺跡出土の文字資料について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 出越茂和・小西昌志 1993 『上荒屋遺跡(二)』金沢市教育委員会
- 土橋由理子 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第151集 蛇谷遺跡・炭山遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中林隆之 2004 「第二章 第四節 古代頸城平野の開発と莊園」『上越市史』通史編1 自然・原始・古代 新潟県上越市
- 野水晃子 2007 「第VII章 まとめ 2 遺物について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第171集 狐宮遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 百瀬正恒 2008 「新潟平野における中世土器の成立」報告の概要』『北陸中世のみち』北陸中世考古学研究会
- 宮本長二郎 1999 「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間－関口欣也先生退官記念論文集－』関口欣也先生退官記念論文集刊行会編 中央公論美術出版
- 宮本長二郎 2002 「古代末から中世の住居建築」『秋田県埋蔵文化財センター 研究紀要』第16号 財団法人秋田県埋蔵文化財センター
- 山崎忠良・野水晃子・田中一穂ほか 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第201集 延命寺遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉岡康暢 1983 「北陸初期庄園の考古学的検討」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1996 「北陸の初期莊園と横江庄遺跡」『東大寺領横江庄遺跡』Ⅱ 松任市教育委員会
- 渡辺裕之ほか 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第138集 台の上遺跡 嶺ノ上遺跡 五反田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

補註1 脱稿後、岩ノ原遺跡Ⅱの発掘調査報告所が刊行された(岡本範之・秋山泰利・金内 元ほか 2010「岩ノ原遺跡Ⅱ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 212集 北前田遺跡Ⅱ 野畔遺跡 諏訪前遺跡 北新田遺跡 中田原遺跡Ⅱ 岩ノ原遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会ほか)。このなかで、遺構の・遺物の年代を検討した金内 元は、平成18年度の発掘調査時に出土した遺物についても触れ、4~6BC グリッド出土土器の年代を、「8世紀中葉から後葉」と訂正している。

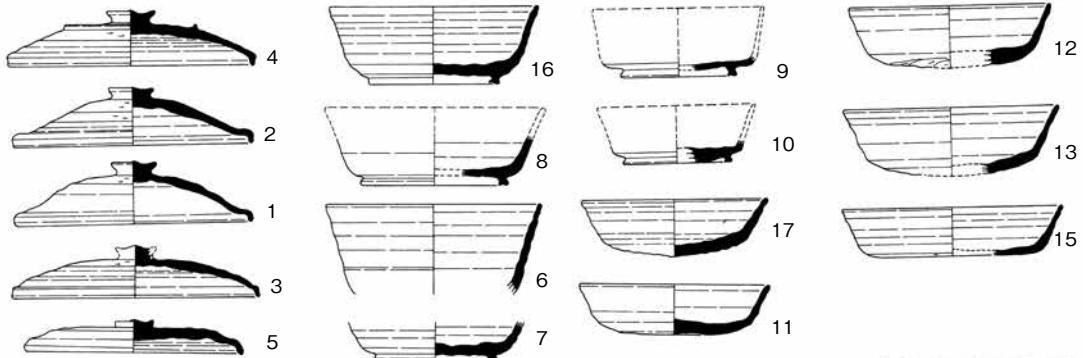
補註2 脱稿後、北前田遺跡Ⅱ(岡本範之・秋山泰利・金内 元ほか 2010「北前田遺跡Ⅱ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 212集 北前田遺跡Ⅱ 野畔遺跡 諏訪前遺跡 北新田遺跡 中田原遺跡Ⅱ 岩ノ原遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会ほか)、北新田遺跡Ⅱ・北荒町南新田遺跡(金内 元・小村正之ほか 2010『新潟県埋蔵文化財調査報告書 210集 荒町南新田遺跡』新潟県教育委員会ほか)の発掘調査報告書が刊行された。北新田遺跡と荒町南新田遺跡は旧河道を挟んだ一連の遺跡でI~VI期の大規模な集落遺跡であること、この2遺跡に北新田遺跡を加えた3遺跡では、Ⅲ期の方位軸建物が一定量存在することが明らかになった。これらの遺跡と岩ノ原遺跡の関連については稿を改めて検討したい。

補註3 脱稿後、高橋一樹 1999 「越後国高田保ノート」『上越市史研究』第4号 上越市史専門委員会のなかで石井庄が現在の高田周辺に存在したことが指摘されていることを知った。岩ノ原遺跡の調査以前に石井庄が関川左岸に存在したことを指摘した重要な論考と考える。

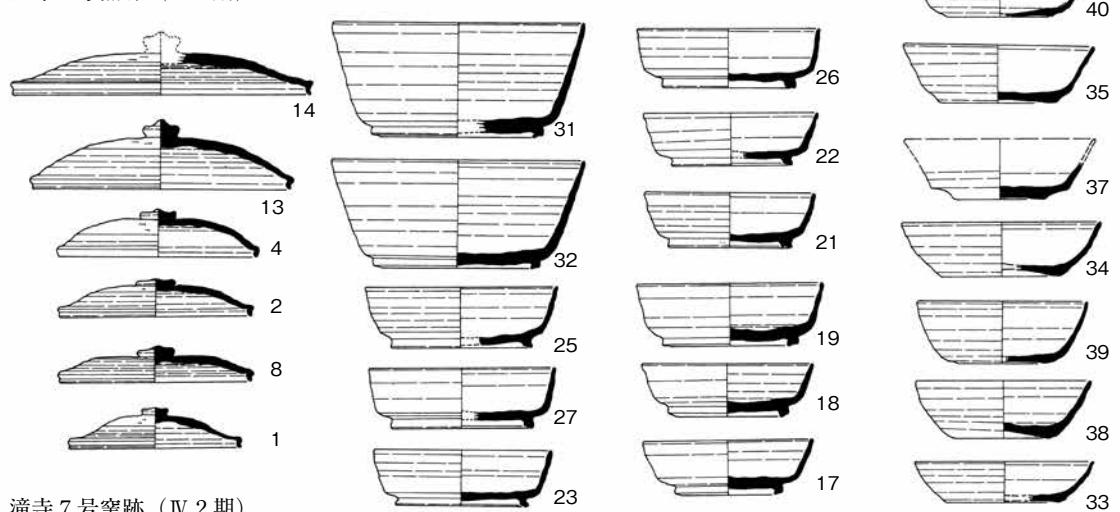
下馬場窯跡（II 2期）



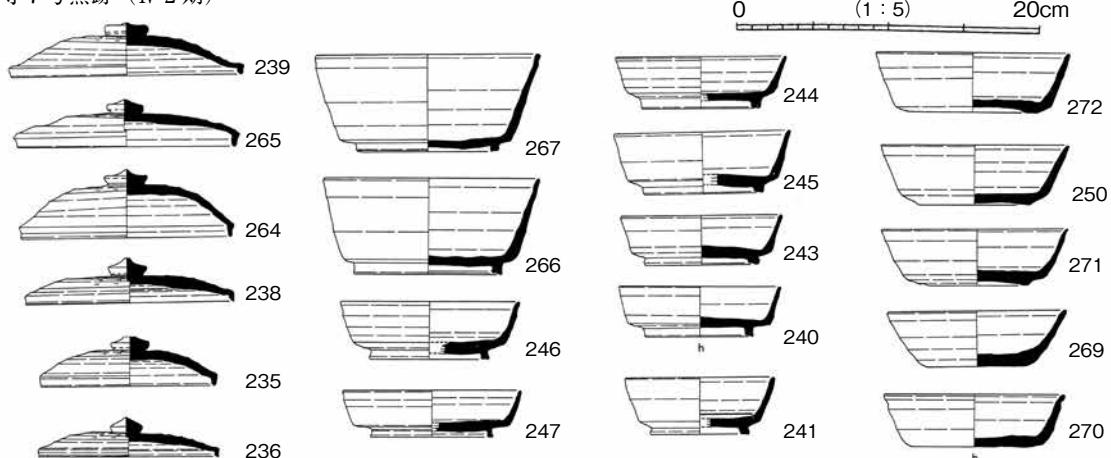
向橋窯跡（IV 1期）



滝寺1号窯跡（IV 2期）

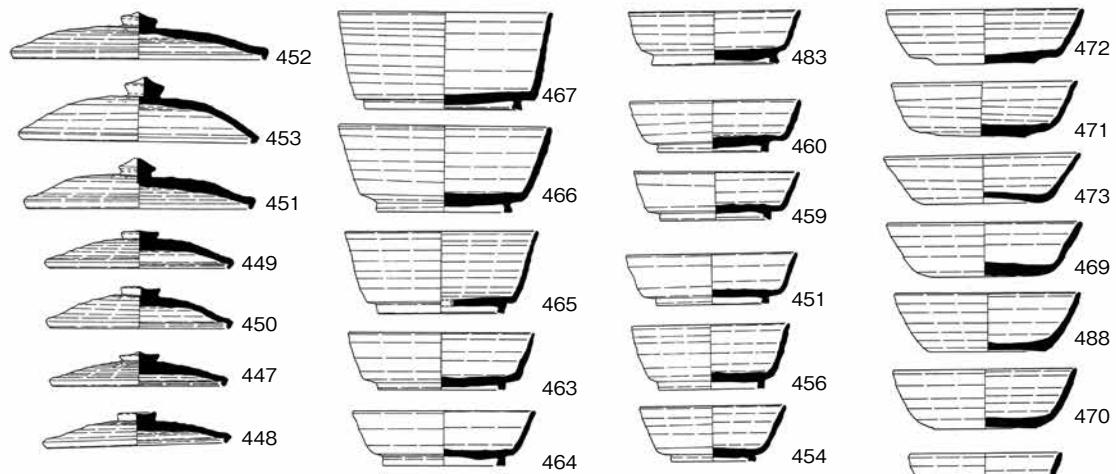


滝寺7号窯跡（IV 2期）

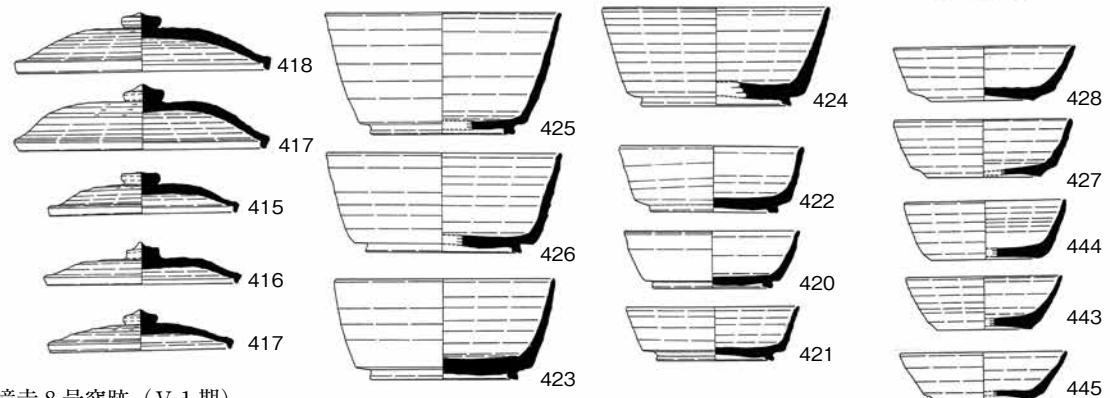


第21図 関川左岸の須恵器窯出土の須恵器1(笹澤2003、小田ほか2006より作成)

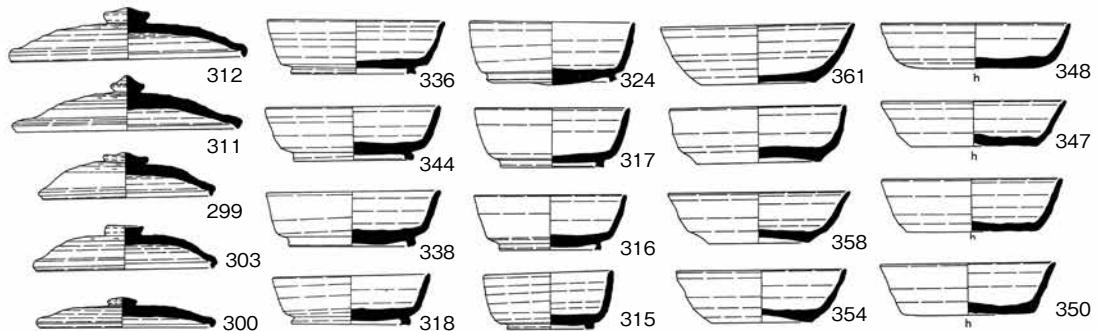
滝寺 13号窯跡 (IV 3期)



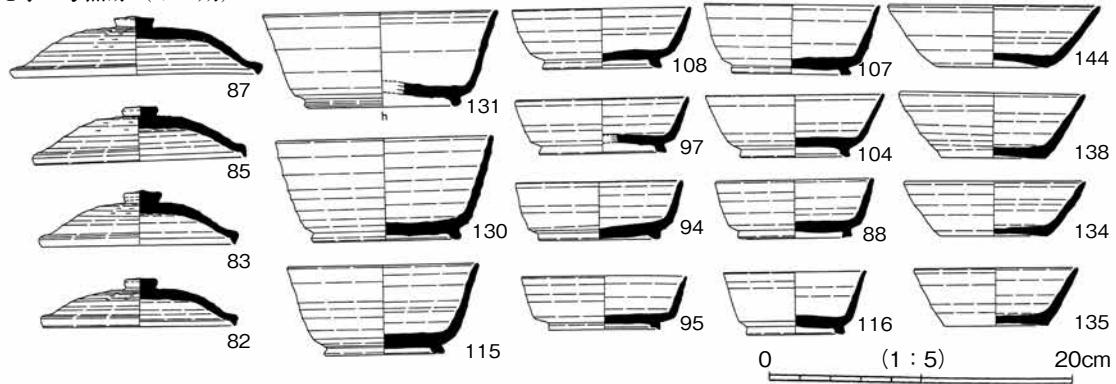
滝寺 12号窯跡 (IV 3期)



滝寺 8号窯跡 (V 1期)

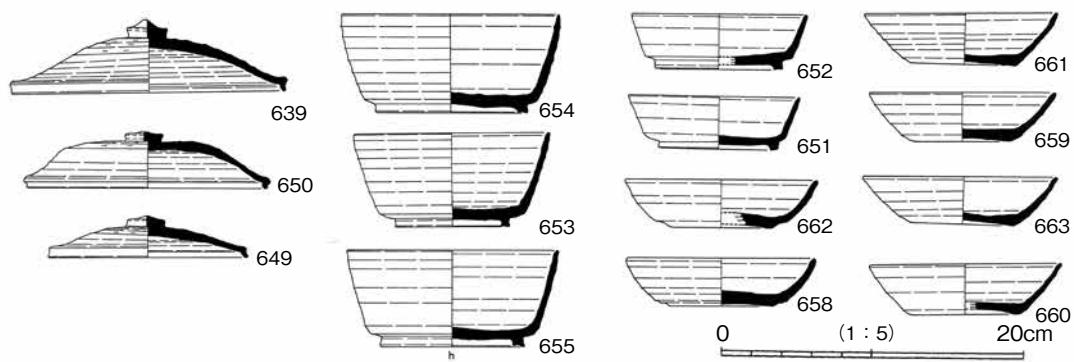


滝寺 2号窯跡 (V 1期)

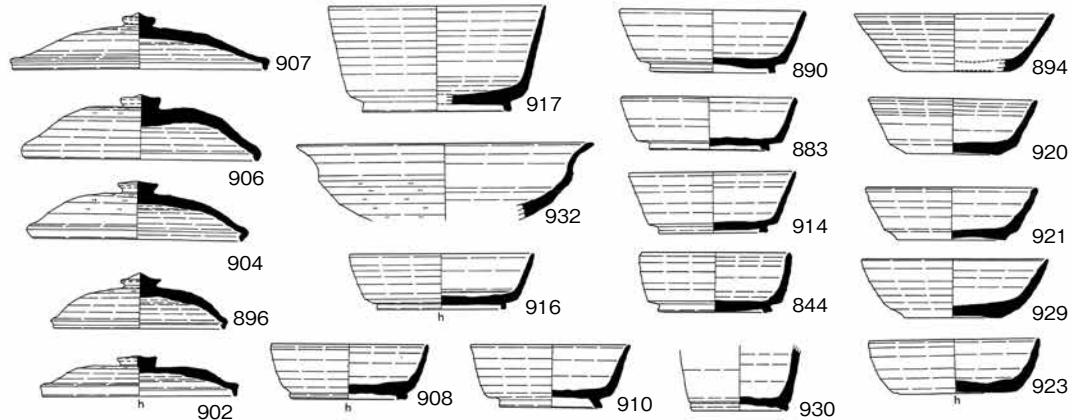


第22図 関川左岸の須恵器窯出土の須恵器2(小田ほか2006より作成)

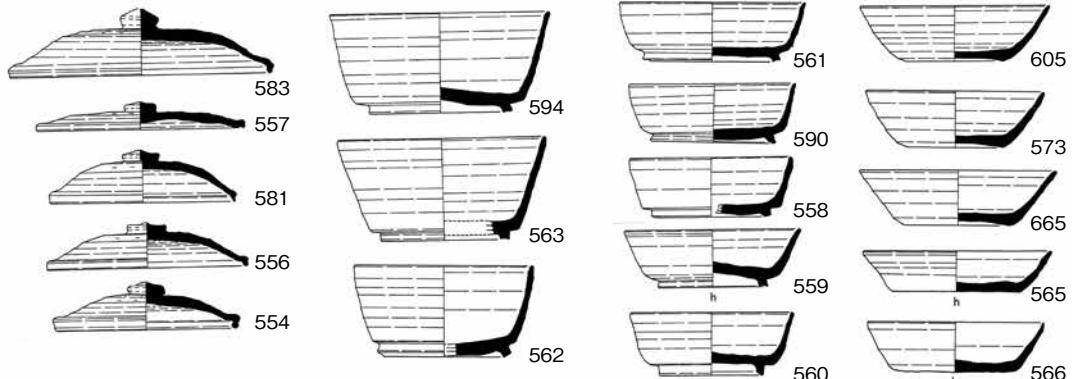
滝寺 10号窯 (V2期)



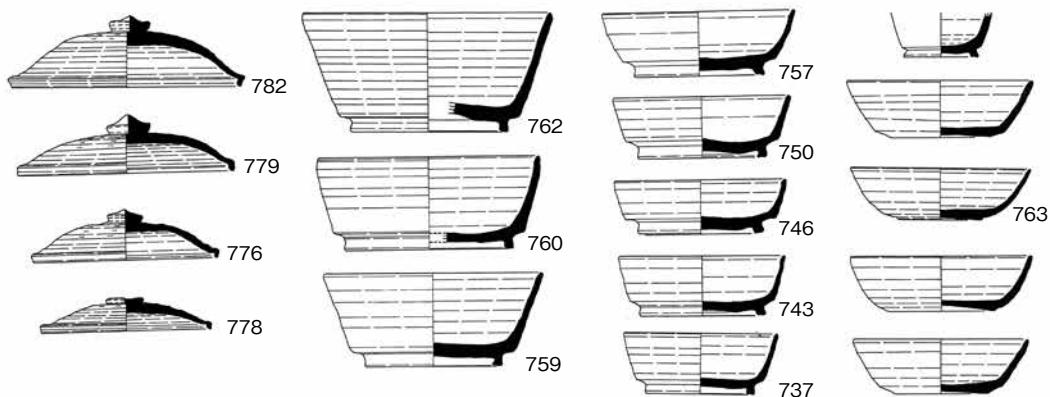
大貫 1号窯 (V2期)



滝寺 9号窯 (V2期)

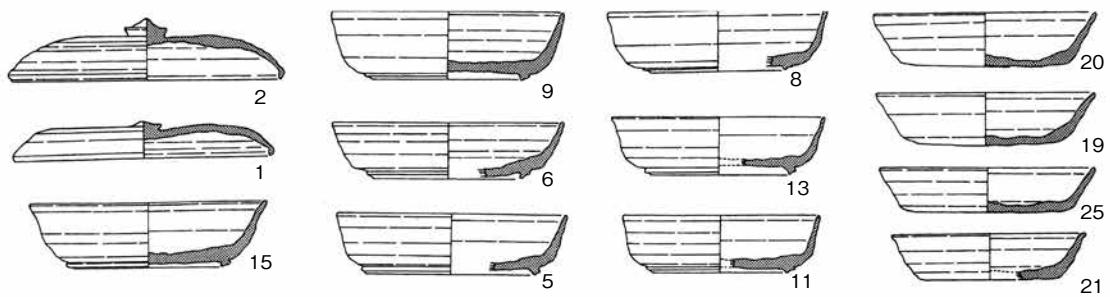


大貫 3号窯 (V2期)

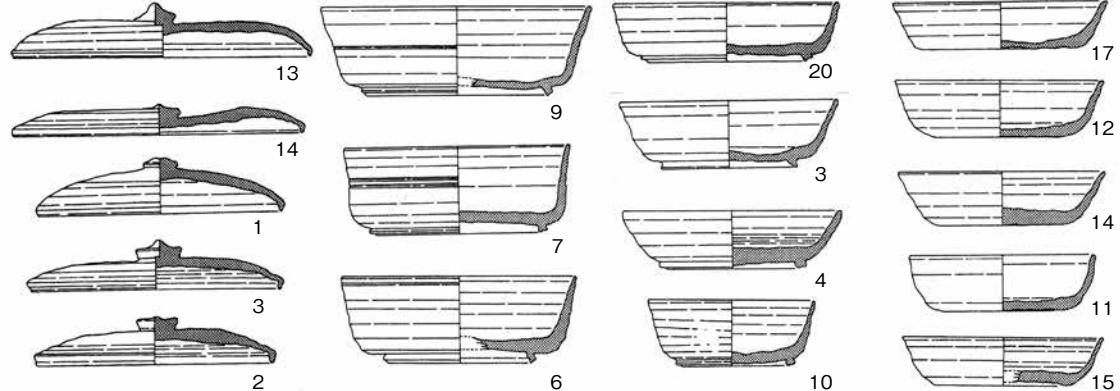


第23図 関川左岸の須恵器窯出土の須恵器3(小田ほか2006より作成)

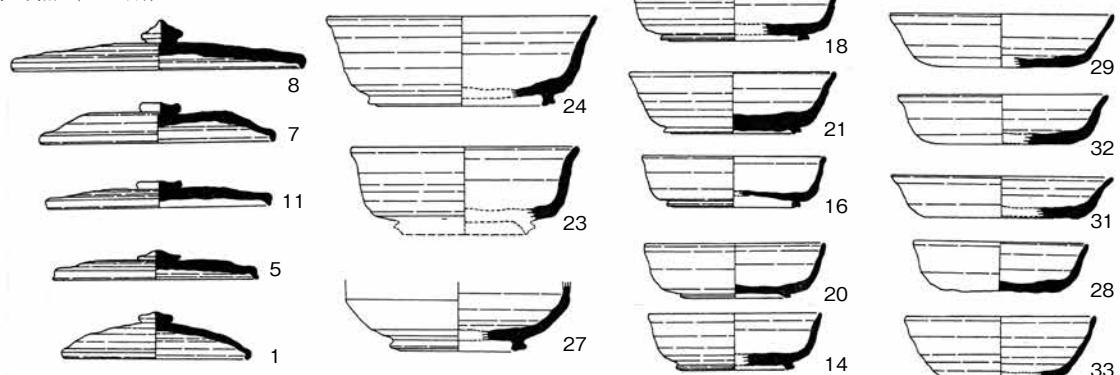
日向 2 号窯 (III 2 期)



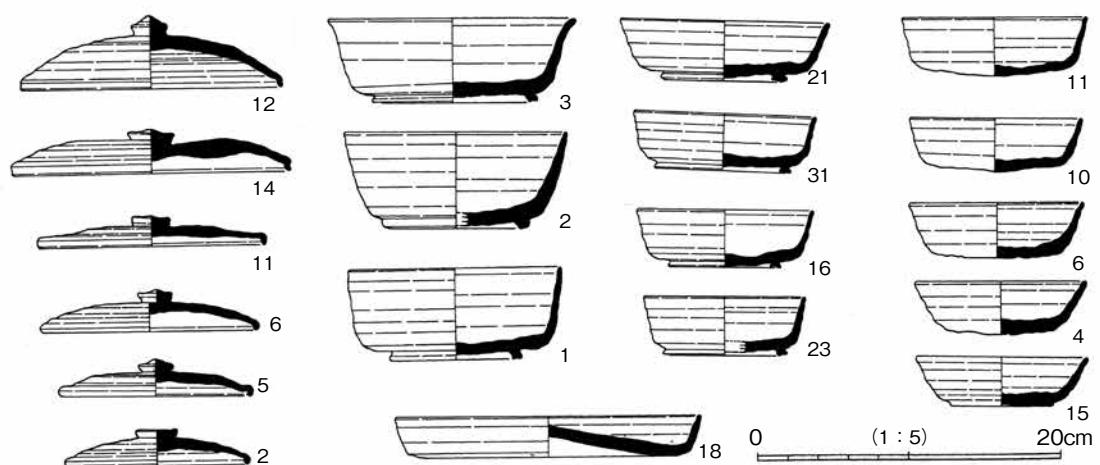
日向 4 号窯 (III 2 ~ IV 1 期)



末野窯 (IV 1 期)

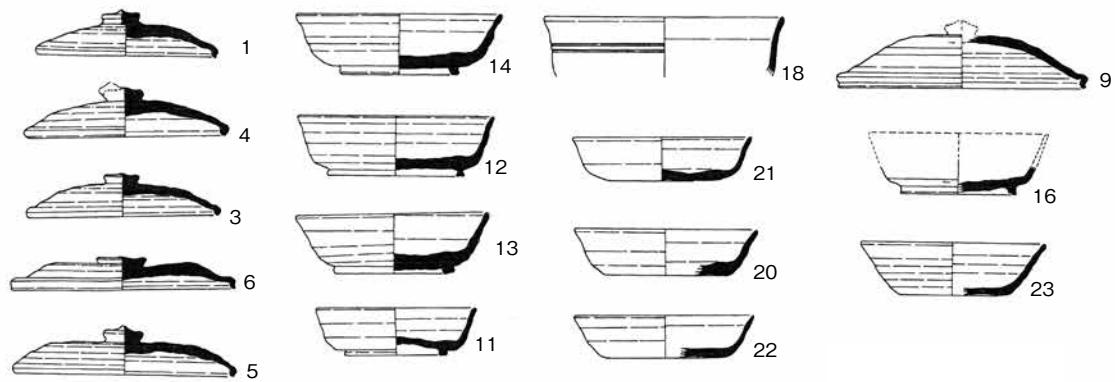


神田長峰 1 号窯 (IV 2 ~ IV 3 期)

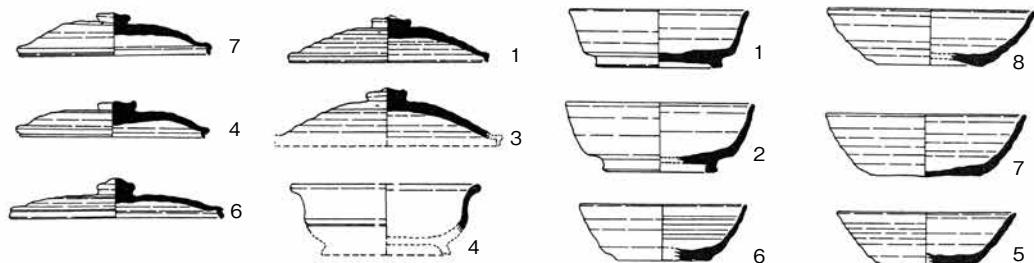


第24図 関川右岸の須恵器窯出土の須恵器1(笹澤200より作成)

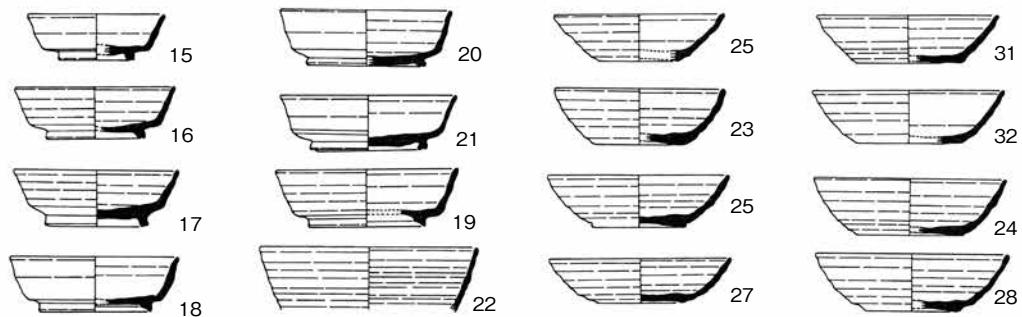
神田長峰2号窯 (IV 2 ~ IV 3期)



今熊1号窯 (VI期)

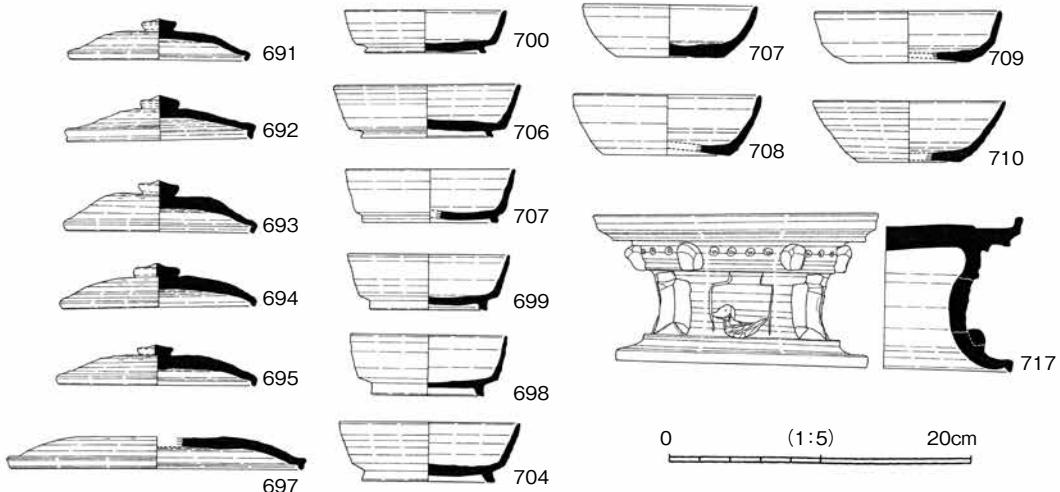


今熊2号窯 (IV 2期)



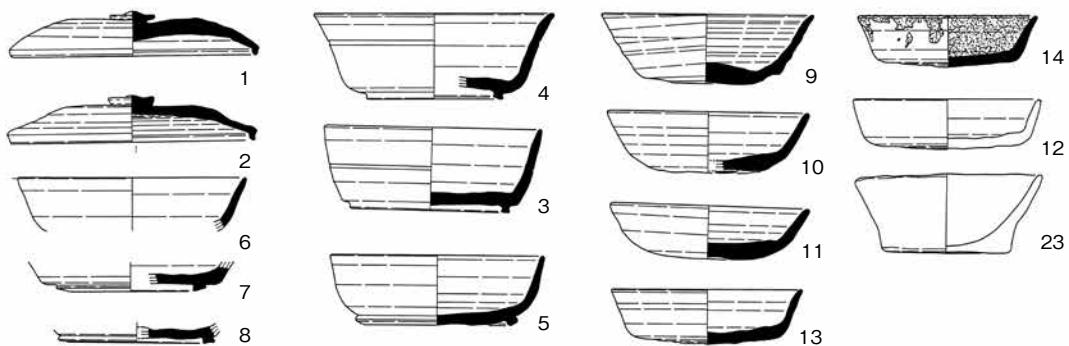
第25図 関川右岸の須恵器窯出土の須恵器2(笹川200より作成)

滝寺11号窯 (VI期)



第26図 関川左岸の須恵器窯出土の須恵器4(小田2006より作成)

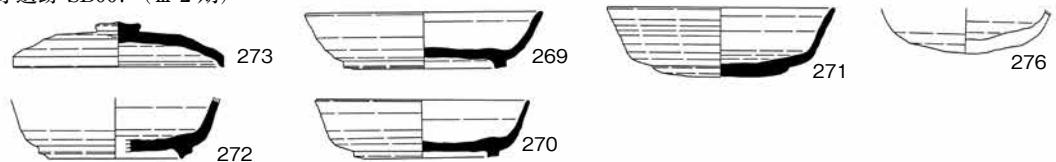
三角田置跡 SD113 (Ⅲ 2 期)



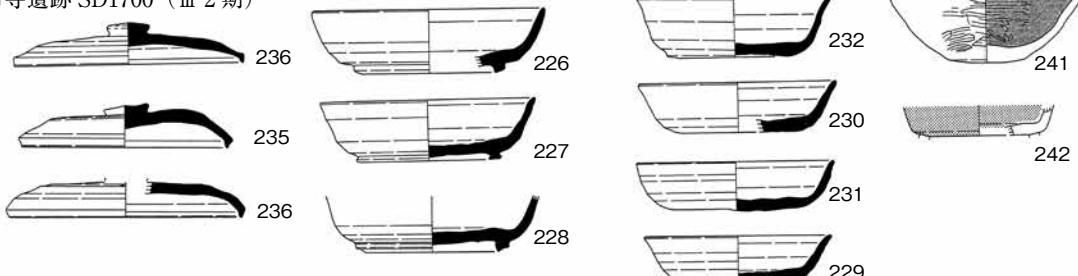
延命寺遺跡 SB002 (Ⅲ 2 期)



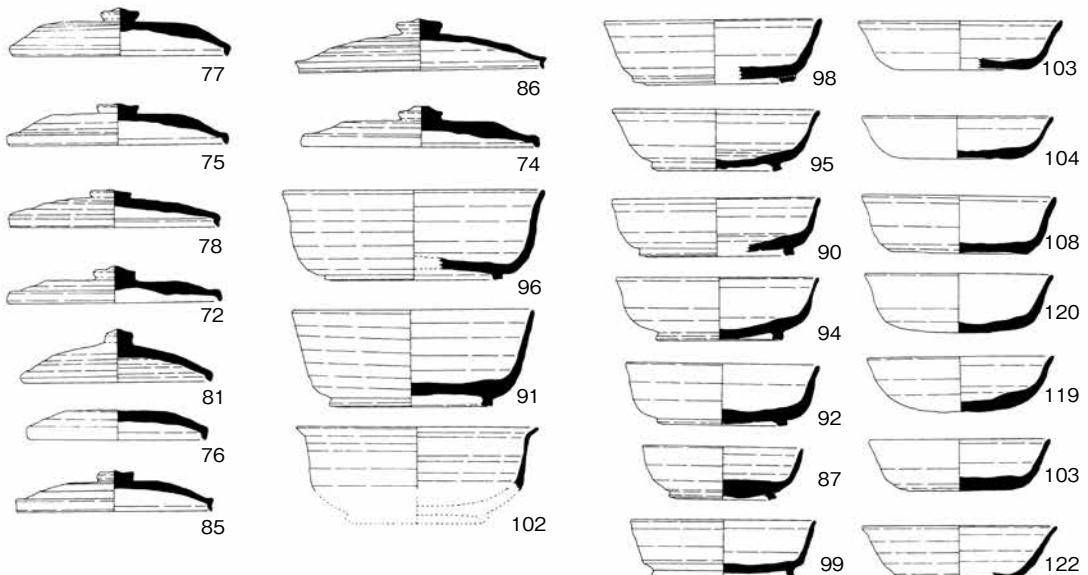
延命寺遺跡 SB007 (Ⅲ 2 期)



延命寺遺跡 SD1700 (Ⅲ 2 期)

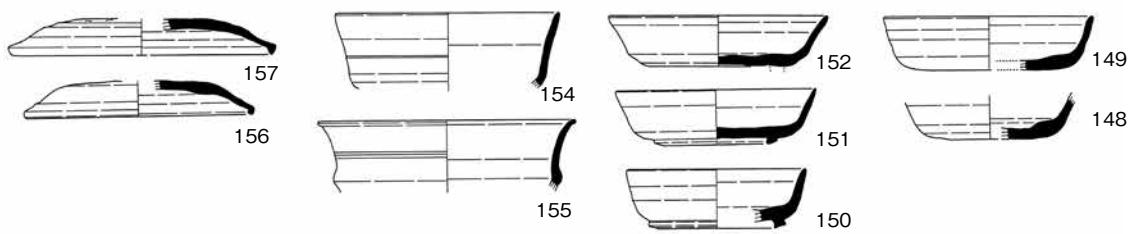


岡原遺跡 SK18 (Ⅳ 1 期)

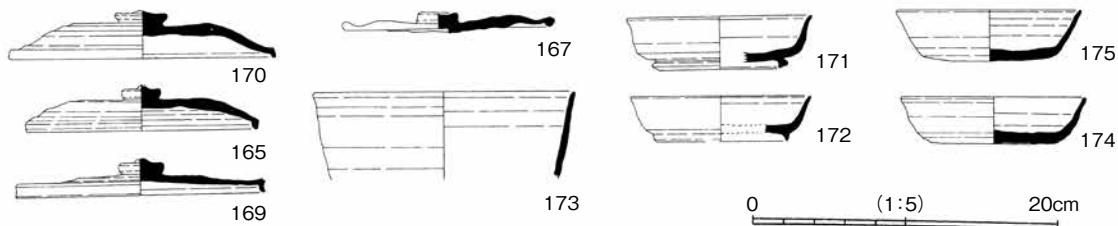


第27図 飯田川・重川流域の古代土器1(澤田ほか2006、山崎2008、笹川1995より作成)

三角田遺跡 SK553 (IV 1 期)



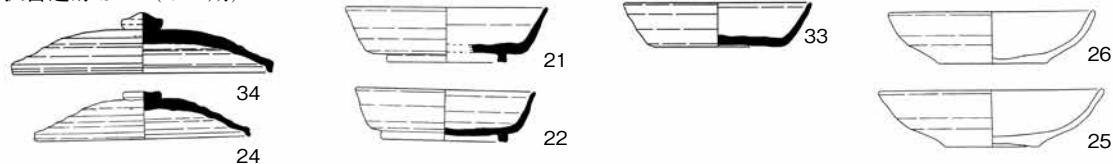
岡原遺跡 SX34 (IV 2 期)



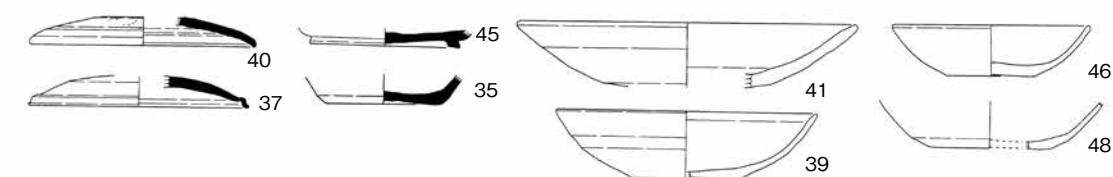
狐宮遺跡 SK358 (IV 2・3 期)



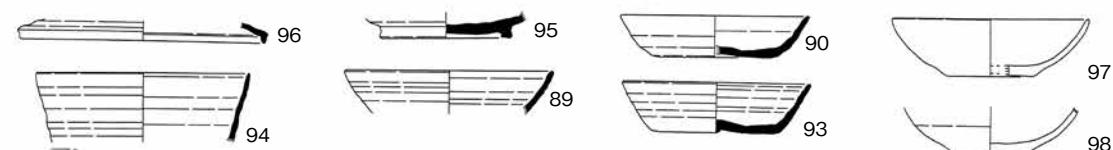
狐宮遺跡 SB1 (V 1 期)



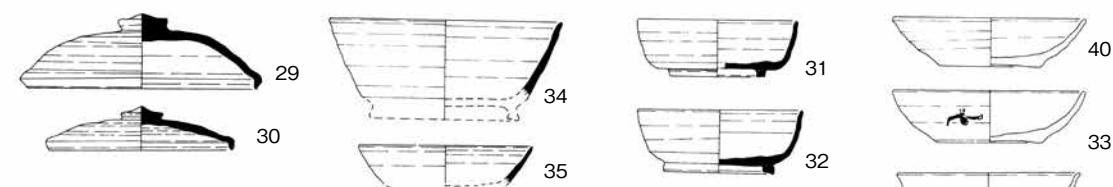
狐宮遺跡 SB2 (V 1 期)



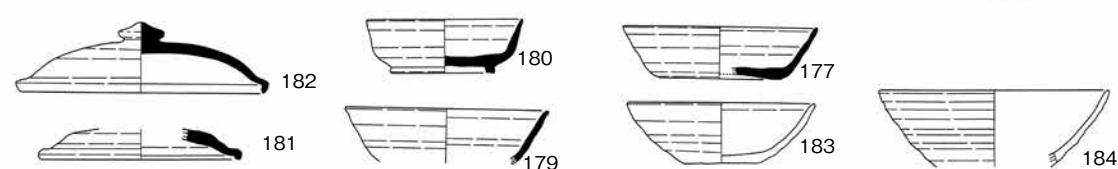
狐宮遺跡 SI394 (V 1 期)



上押出遺跡 SX91 (V 1 期)

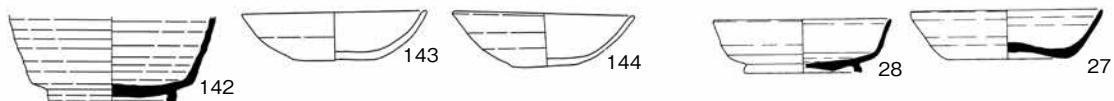


三角田遺跡 SK47 (V 2 期)



第28図 飯田川・重川流域の古代土器2(澤田ほか200、笹川199、飯坂200、小島ほか200より作成)

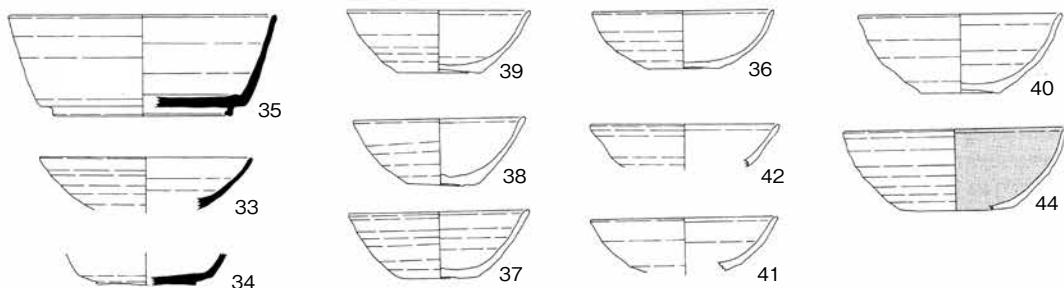
狐宮遺跡 SK472 (V 2 ~ VI 1 期)



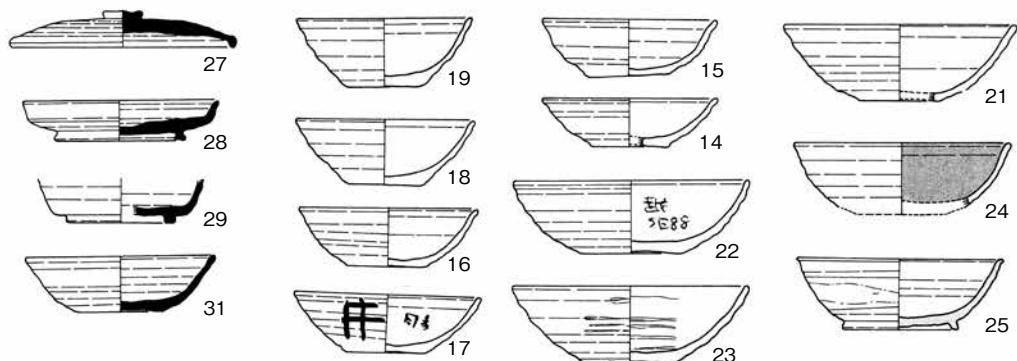
岡原遺跡 SK83 (V 2 ~ VI 1 期)



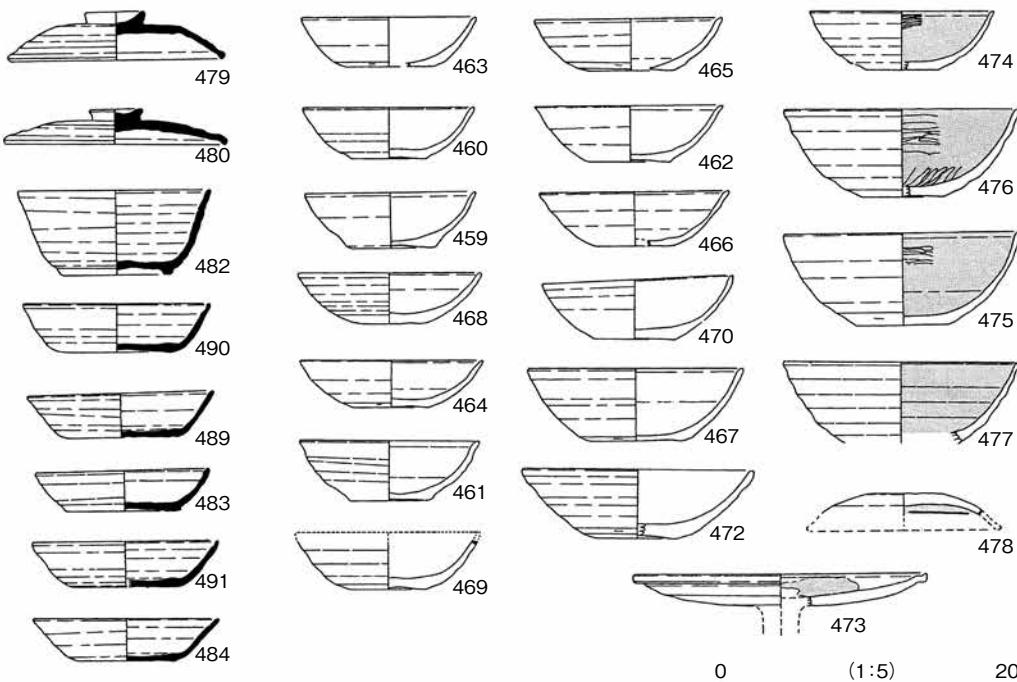
岡原遺跡 SK3 (V 2 ~ VI 1 期)



越前遺跡 SE88 (V 2 ~ VI 1 期)

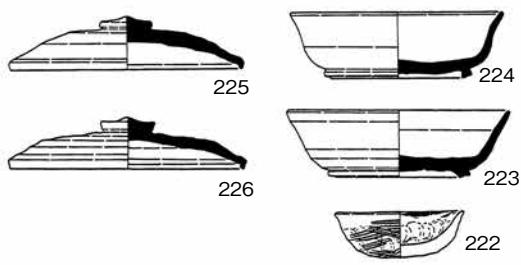


保坂遺跡 SD51 (VI 1 期)

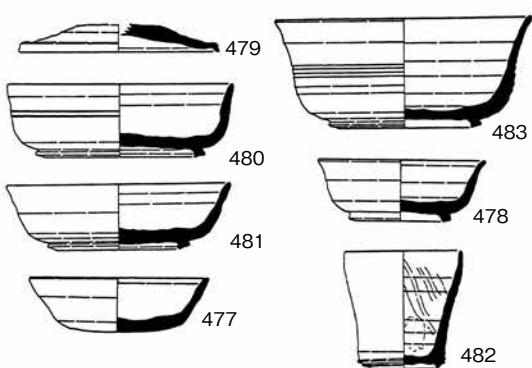


第29図 飯田川・重川流域の古代土器3(飯坂ほか2007、笹川1995、笹沢2003b、小島ほか1998より作成)

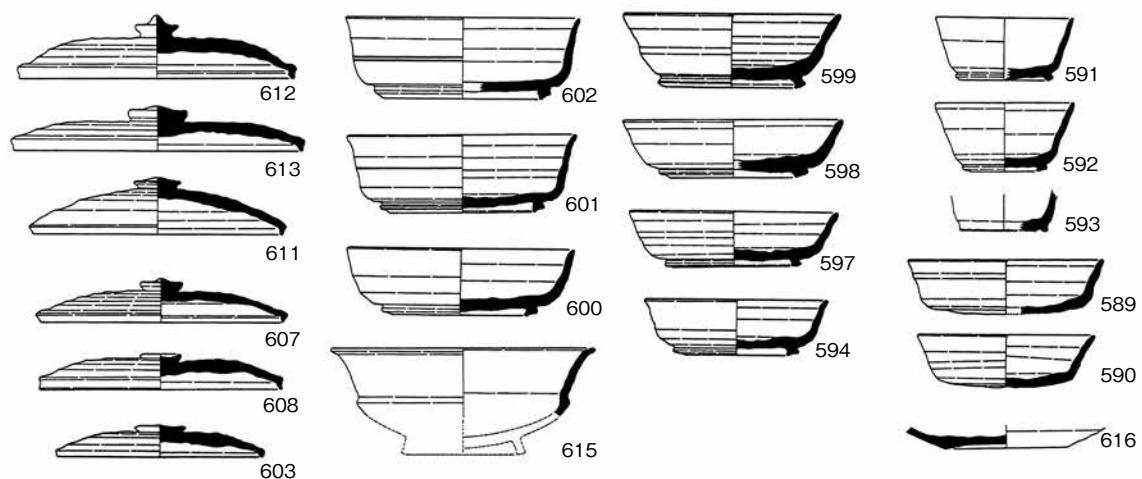
今池 SK140 (Ⅲ 1 ~ Ⅲ 2 期)



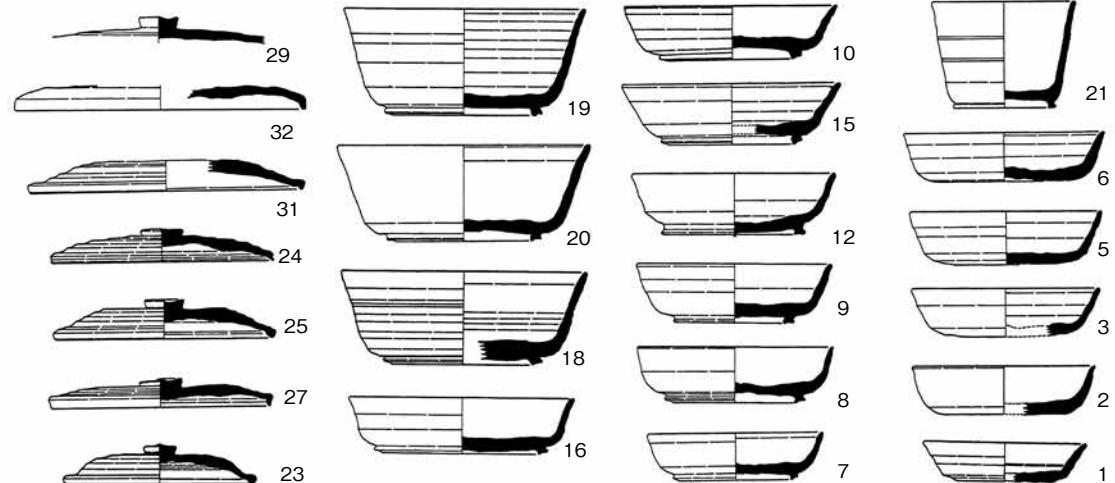
今池 SK391B (Ⅲ 2 期)



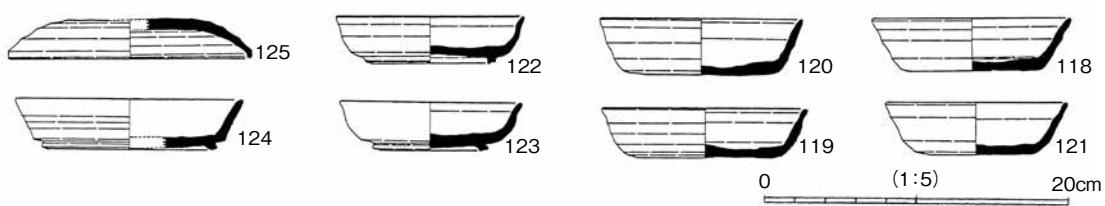
今池 A 地区 (Ⅲ 2 期中心)



今池遺跡 SK24 (Ⅳ 1 期)

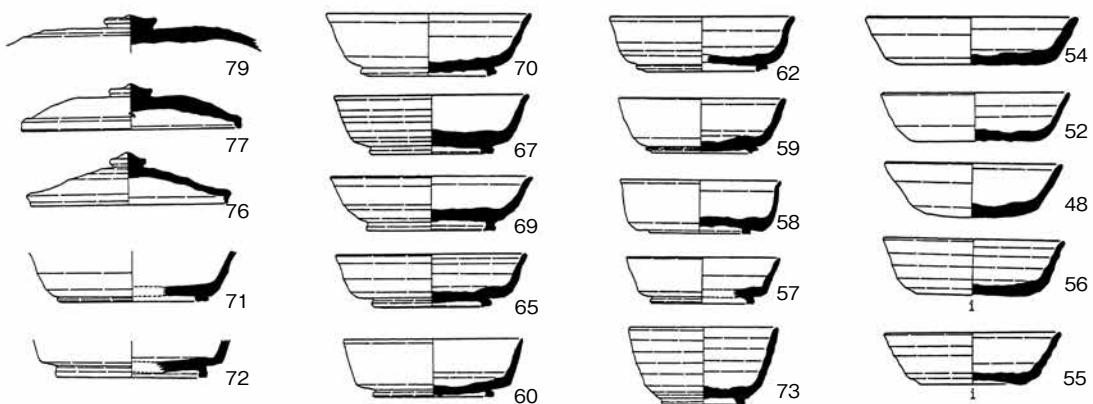


今池遺跡 SK (Ⅳ 1 期)

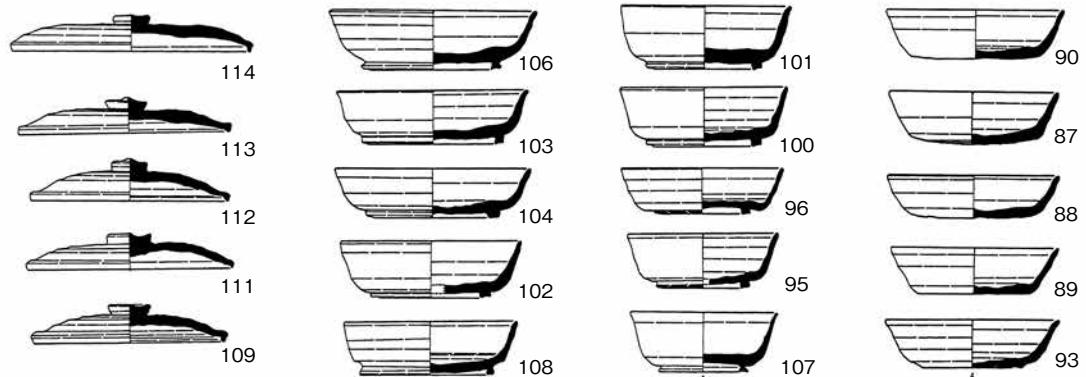


第30図 今池遺跡群出土土器1(坂井ほか1984より作成)

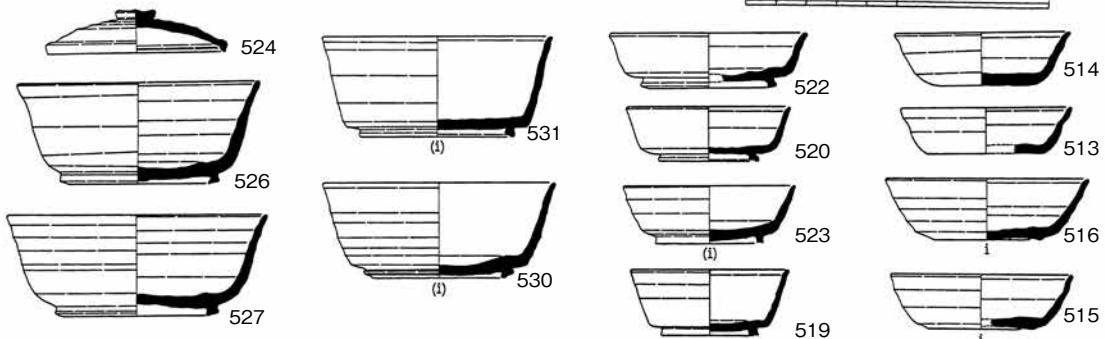
今池遺跡 SK21B (IV 2 期)



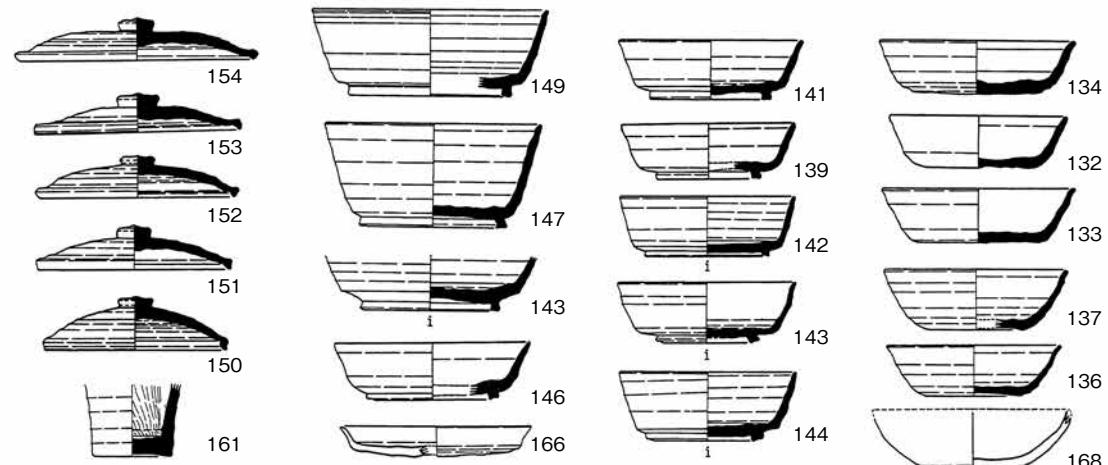
今池遺跡 SK21A (IV 2 期)



今池遺跡 SD321 (IV 3 期)

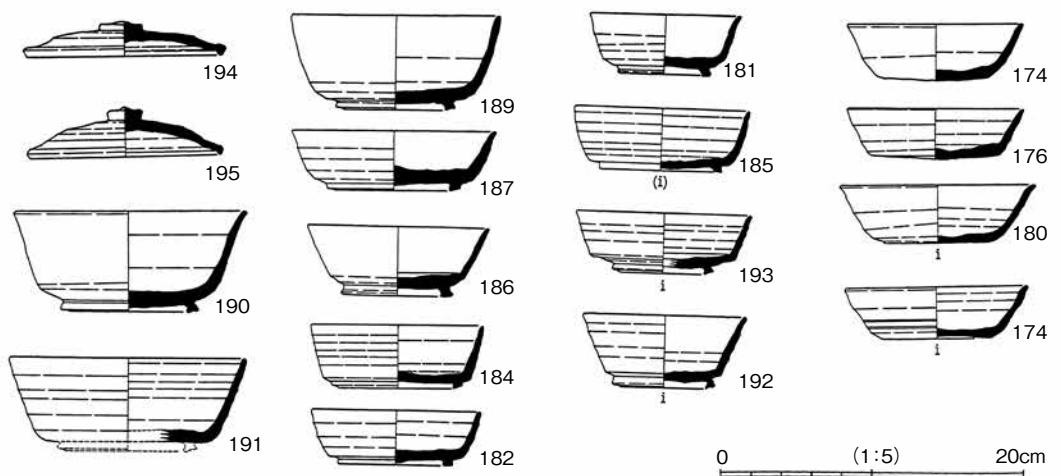


今池遺跡 SK102 (IV 3 期)

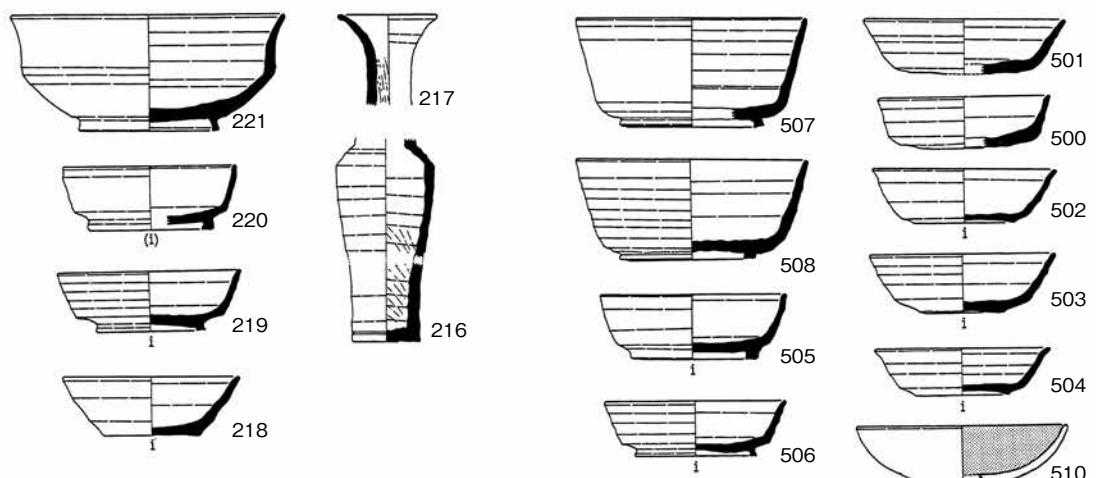


第31図 今池遺跡群出土の古代土器2(坂井ほか1984より作成)

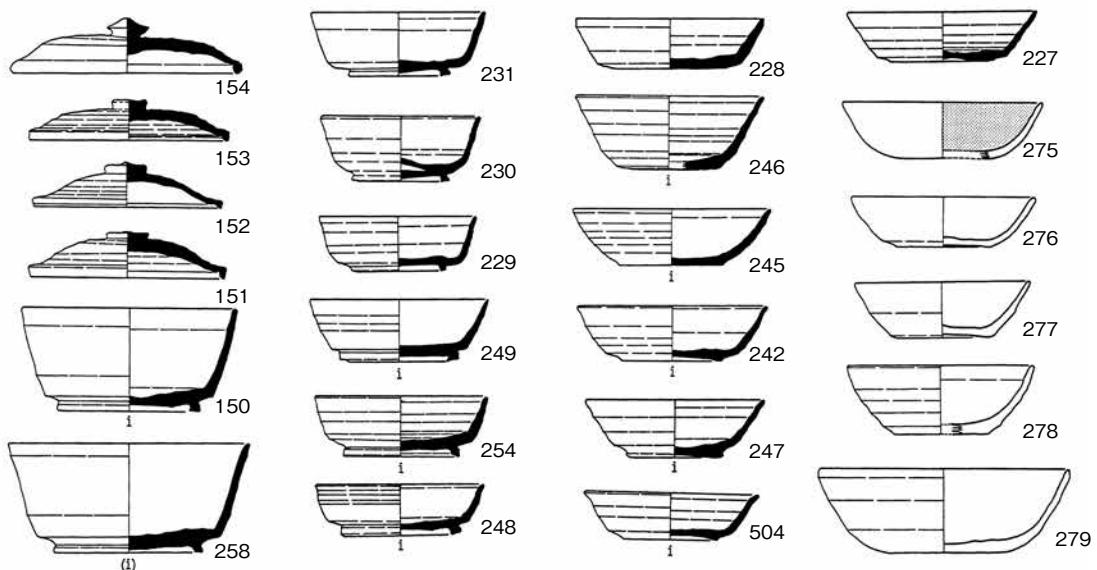
今池遺跡 SK24B (IV 2 期)



今池遺跡 SK120 (V 1 期)

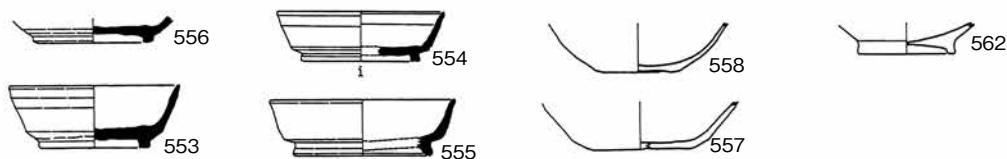


今池遺跡 SD201 (V 2 期)

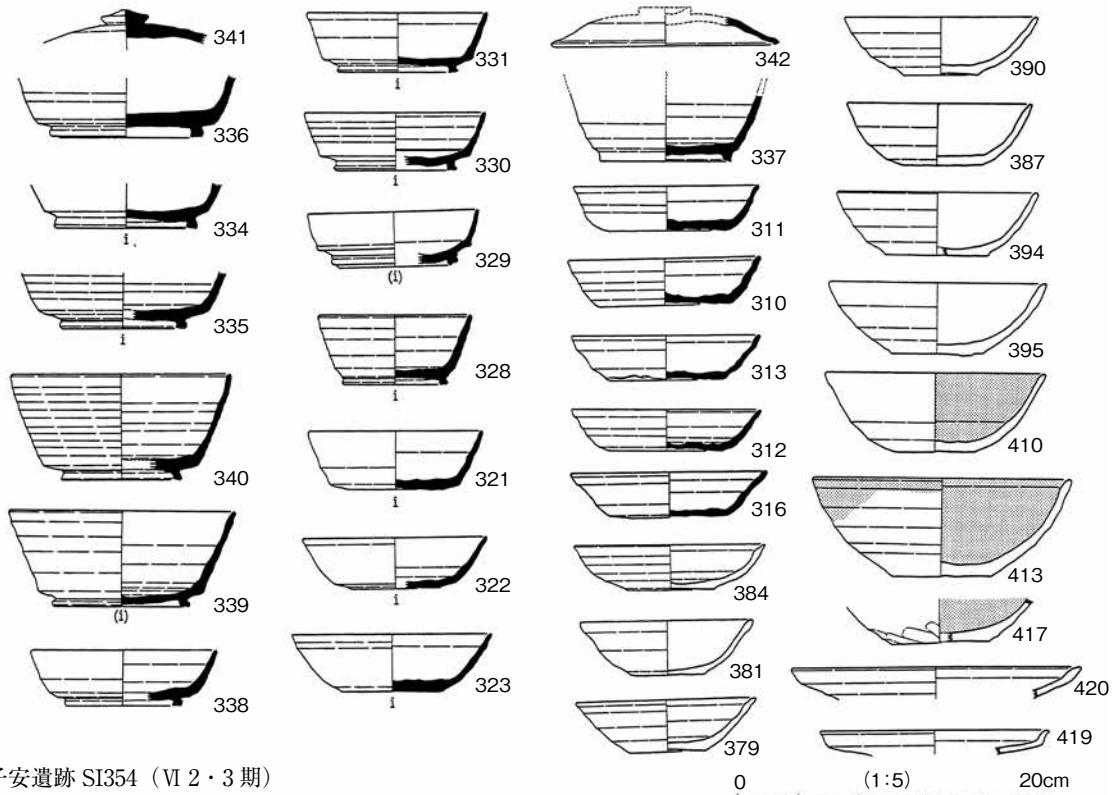


第32図 今池遺跡群出土の古代土器2(坂井ほか1984より作成)

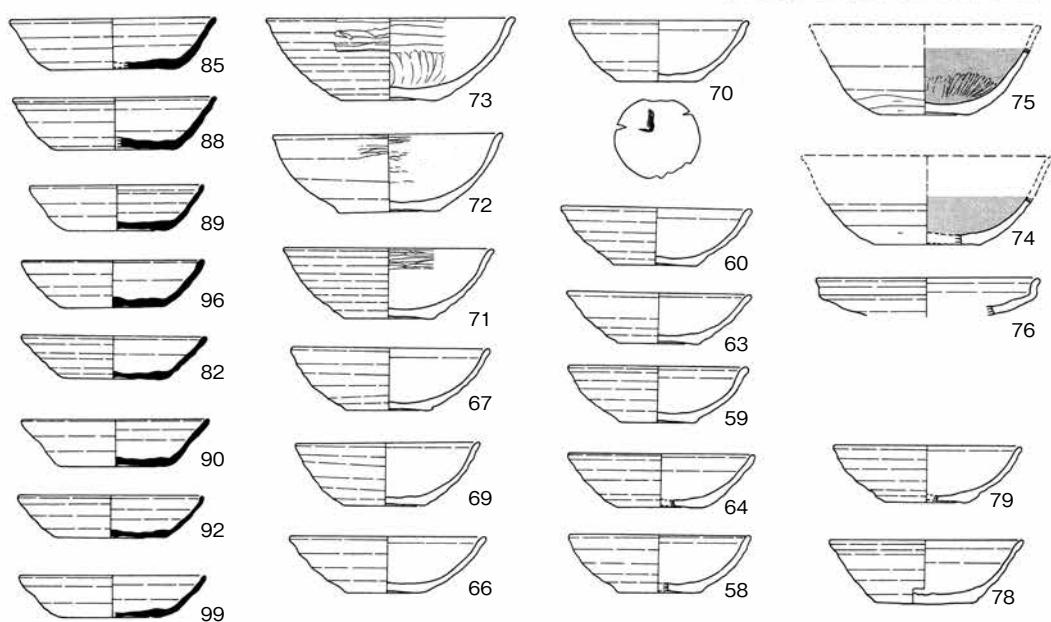
今池遺跡 SD324 (V 2 ~ VI 1 期)



今池遺跡 SD3 (VI 1 期中心)



子安遺跡 SI354 (VI 2・3 期)



第33図 今池遺跡群出土の古代土器(坂井ほか1984、笹澤2003より作成)